

藤井乙男
岡井慎吾著



新體日本文學史
全

東京 金港堂書籍株式會社

凡例

一、本書ハ師範學校・中學校等ノ教科用トシテ編述シタルモノナリ。今、編述ノ際最モ意ヲ用非タル點ヲ左ニ陳ベム。

い、現今ヨリ始メタルコト。簡ヨリ繁ニ進ムトイフ事ガ教授ノ一原則タルト同時ニ、近キヨリ遠キニ及ブトイフコトモ、亦有力ナル原則タルナリ。此原則ヲ歴史教授ニ適用セバ、現時ヨリ溯リテ上古ニ至ルコト、ナラム。

而シテ文學史ニ在リテハ、此方法ニヨリテ、現今ノ文學上ノ事實ニ關スル知識ヲ基礎トシテ、漸次歩ヲ進メムハ、亦此學科ヲシテ趣味アラシムル所以ナラザラムヤ。

況ヤ讀本ニ於テハ、近古文學ヲ學ベルノミノ者ニ、直ニ上古ノ文學ヲ課セムヨリモ、平常習見ノ者ヨリ悟入セシメムヲヤ。是、此書ノ新體ヲ用非タル理由ナリ。

ろ引例ノ選擇。教科書ニ引用セル二三ノ例ニヨリテ、某著作ノ大概ヲ領セシメムトスルハ、頗ル難事タリ。況ヤ之ニ據リテ、該文學者ノ特色ヲ知ラムトスルヲヤ。此ヲ以テ此書ノ例ヲ擇ブ、成ルベク他ト關係アルモノ(例ハバ、漆栗毛ト狂言記淨瑠璃ト謠曲)ヲ採リテ、是ニ由リテ其關係ト異同トヲ知ラシメムコトヲ務メタリ。は、上古文學ノ記載法。ヲ原ノマ、ニシテ、之ヲ讀ムコトガ文學史上ノ一事實タリシ所以ヲ明カナラシメタリ。坊間行ハル、諸書ヲ見ルニ、概ネ漢字交リ文體ニ書キナセリ、中等教育ノ程度ニテハ、此體トナスモ已ムヲ得ザルベケレドモ、斯クテハ爭カ本來ノ面目ヲ知ルヲ得シムベキ。又、此書ハ既ニ振假字ヲ施シテ、カノ難解ナラムコトヲ避ケタリ。

に、我國ノ漢字。ヲ等閑ニスベカラザルハ、文部省教授要目ニモ既ニ定メラレタリ。此書、便ヲ以テ之ヲ概叙シ、且、現今諸讀本ニ闕如セリト覺シキ上、中、近古ノ詩文、近世ノ詩數篇ヲモ收メタリ。又、記錄文、書牘文、言文一致體ナドモ、文學史上一體タルモノモ、其儘附記セリ。一、本文ハ、綱ヲ提ゲタルノミニテ目ニ及バズ、勢ヲ審ニセルノミニテ理ニ及バズ、コレ全ク教授ノ餘地ヲ存セム爲ナリ。讀者請フ之ヲ諒セヨ。

明治三十五年七月

編述者識

代 年		表 覽 一 目 分 書 本					
		文 學					
紀元元	上	散 文		律 語			
	古			(目ニテ視ルベキ)		(耳ニテ聽クベキ)	
紀元一四五三	中	散文(今昔ノ類)		今 朗 催	馬	和	
	古	(作リ物語類)		樣 詠 樂	平家物語	歌	
紀元一八四五	近	御伽草子	和漢混和文	擬古文	(狂言) 曲	連 歌	和 歌
	古	小 說	和漢混和文	擬古文	脚 本	淨瑠璃	和 歌
紀元二二六二	近					俳諧俳句	
	世						
紀元二五二七							

新 日本文學史目錄

序 論

一、近世文學又江戸文學

- 和歌
- 俳諧俳句
- 脚本ト淨瑠璃
- 擬古文國學ノ發達
- 和漢混和文漢學ノ隆盛
- 小説

二、近古文學

- 概論
- 和歌
- 連歌
- 平家物語ト謠曲

五 一〇 一六 二三 二三 四二 五二 五四 五九 六一

擬古文

和漢混和文

御伽草子

三、中古文學又平安文學

概論

和歌

今様朗詠催馬樂

散文

四、上古文學

概論

和歌

散文

結論

附錄

六七

六九

七五

七七

七九

八七

八九

一一〇

一一一

一一六

一二六

一一三

新日本文學史

序論

明治昭代

ハ、文ノ園生ノ色香モ日ニソヒ月ニ盛ナリ。

見ヨ、本居豐穎、久米幹文翁ノ擬古文、福澤諭吉、福地櫻痴翁ノ普通文ニ於ケル、坪内逍遙氏ノ普通文ニ長ケテ、小説戯曲トモニ能クスル、又小説ニ妙ナル幸田露伴、尾崎紅葉氏、評論ニ秀デタル森鷗外、高山林次郎氏、或ハ御歌所ナル高崎正風翁アレバ、之ニ對スル新派ノ歌人アリ、日本新聞ナル正岡子規氏アレバ、之ニ對スル舊派ノ俳人アルナド、柳櫻ヲコキ交ゼ

文學士 藤井乙男 閱

岡井慎吾 著

タル春ノ錦ニアラズヤ。特リ和歌俳句ニ新舊ノ別アルノミナラズ、スベテ文學ハ新陳代謝シツ、發達シユクモノナリ。コノ發達ノ跡ヲ歴史的ニ研究スルハ、ワガ文學史ノ業ナリ。ワガ國、上下三千年、固有ノ文學アル上ニ、アル時ハ支那文學入り、アル時ハ印度思想來リ、今ハ又歐西文學ノ趣味加ハラムトスル其跡ハ頗ル面白キ研究ナリ。今ソノ研究ノ便ヲ圖リテ、明治維新以前ヲ

- 一、近世文學又江戸文學 徳川幕府執政ノ間
 - 二、近古文學 元和偃武ヨリ鎌倉幕府ノ始マデ
 - 三、中古文學又平安文學 平氏滅亡ヨリ桓武遷都迄
 - 四、上古文學 奈良朝ノ終ヨリ開闢マデ
- ノ四時代ニ分チテ論ゼム。

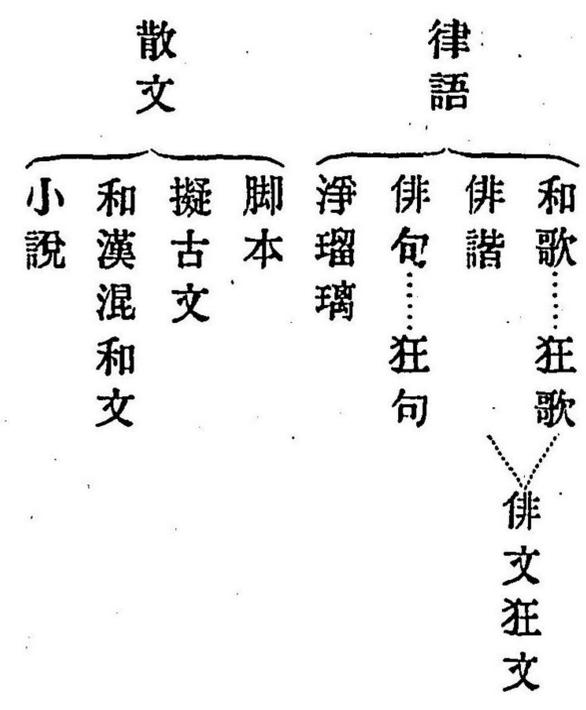
一、近世文學 又 江戸文學

概論

慶應三年、徳川十五代將軍慶喜、大政ヲ奉還セシヨリ、浜リテ、ソノ祖家康慶長八年ニ始メテ、征夷大將軍ニ補セラレシマデ、二百六十五年間ハ、四海太平ノ化ニ露ヒ、萬民鼓腹ノ樂ヲ享ケシカバ、文化亦隆盛ヲ極メテ、今日ノ氣運ヲ開キタリ。嘉永以後ハ、外憂内患相踵ギテ起リ、人心洶々タリシカバ、文學モ衰色アルニ至リシガ、文化・文政ノ交ハ、國文ニハ縣居門ノ俊秀各ソノ長ズル所ヲ以テ世ニ鳴リ、漢學ニハ寛政ノ三博士以來、昌平校ヲ出デタル鉅儒多ク、何レモ王侯ノ講ニ侍シテ師長ノ貴キニ居リ、又京傳・馬琴等ノ小説家アレバ、蜀山人・眞顔等ノ狂歌師アリテ、文學ハ上士大夫ヨリ下市井ノ庶

民ニマデモ持テ難サレテ非常ノ隆盛ヲ極メタリキ。只儒者ノ氣風ハ東西自ラ逕庭アリテ、京阪ニオイテハ概ネ氣節ヲ以テ自ラ高ブリ、出デ、仕フルヲ屑シトセザル風アリキ、而シテ後世勤王ノ氣風ハ多クコノ中ニ養ハレタリ。文化文政ニ前ダチテハ元祿ヲ盛ナリトス、淨瑠璃ニ近松門左衛門アリ、浮世草紙ニ井原西鶴アリ、俳句ニ芭蕉アリテ俗文學ハ文化文政ヨリモ、動モスレバ優ラムトシ、漢學ニハ古學派・古文辭學派等相踵ギテ興リ、卓識雄才ノ士多カリキ。但シ國文ノミハ正ニ契沖・季吟ノ時ニ當リテ、ナホ草創タルヲ免レズ。然シテ最モ注意スベキハ、此時ノ文學ノ中心ハ、京阪地方ニ在リシコトニテ、特ニ俗文學ガ大阪ニ榮エシハ、上ニ搢紳侯伯ナク、平民ノ勢力最モ大ナリシ故ナラムトイフ。カ、ル盛ナル文化ハソモ誰ノ賜ゾ。ソノ源ヲ尋ヌルニ、夙ニ

文庫ヲ設ケ、書籍ヲ板行シ、學校ヲ創立シテ、士民ニ學問ヲ奨勵シタル家康ソノ人ナラザラムヤ。今、コノ時代ノ文學ヲ類別スルコト左ノ如シ。



和歌

香川景樹
ノ桂園派

今日コソ、高崎翁等ノ歌風ハ世ニ舊派ト稱セラレ、近世ニテハ却リテ亦新派タリシナリ。翁ノ師ヲ八田知紀トイヒ、其師ヲ香川景樹トイフ。景樹ハ因州鳥取ニ生レ、十五歳ノ時、已ニ百首異見ヲ著シ、ホドノ俊才ナリキ。長シテ京都ニ出テ、遂ニ和歌界ニ一新機軸ヲ出シタリ。歌集ヲ桂園一枝トイフ。知紀、熊谷直好等ソノ高弟タリ、世ニ之ヲ景樹派トイフ。景樹ノ意見ハ其著新學異見ニアリ、コレ加茂眞淵ノ新學ニ對シテ異論ヲ唱ヘタルモノナリ。論者、景樹ノ歌ヲ評シテ、巧麗ナルコト新古今ニ比スベシトイヘリ。

眞淵ノ門ヨリ出デナガラ、新古今ヲ標的トシテ詠ミタルハ本居宣長ナリ。

小澤蘆庵

コノ時、京都ニ小澤蘆庵アリ、氣節ヲ以テ高ク持セシガ、歌ハ能ク平易ノ語ヲ以テ清新ノ調ヲナセリ。伴蒿蹊之ト竝ビ稱

加茂眞淵
ノ縣居派

セラレテ、又文章ニ長ズ、其著國つ文世々の跡ハ今日イハユル文學史ノ一面ヲソナヘタルモノナリ。眞淵ハ國文學界ノ泰斗ナルガ、ソノ尤モ力ヲ盡シ、ハ萬葉集ノ研究ニシテ、自ラ詠メル歌モ、萬葉集ノ調ヲ摸シ、ツヒニハ新學ノ如キ意見トナレリ。縣居家集アリ、世ニ眞淵派トイフ。其門ノ橘千蔭、村田春海モ亦歌ニ長ゼリ、此二人ハ寧ロ古今集ヲ標的トナセリト云フ。

此ノ如ク萬葉古今新古今ナド自由ニ祖述セラレシハ、近世ノ中比ヨリニシテ、其以前ニハ歌ニハ傳授トイフコトアリテ、イト窮屈ナルモノナリキ。此關門ヲ打チ破リシハ、實ニ戸田茂睡ナリ。

之ト同時ニ、大阪ニ下河邊長流、僧契沖アリテ、共ニ萬葉集ニ通ジ、久シク廢レタリシ長歌ヲ再興セリ、長流ノ歌集ヲ晩花

長流ト契
沖ト

集契沖ノヲ漫吟集トイフ。

古今傳授ヲ以テ有名ナル細川幽齋ハ、此時代ノ初期ノ人ナリ、武人ナガラ諸藝ニ通ジタリトイフ。小濱ノ城主タリシ木下長嘯子モ亦歌ニ名アリ。

吉野山霞ノ奥ハ知ラネドモ見ユル限ハ櫻ナリケリ
八田 知紀

モミチ葉ヲ舟ト浮ベテ飛ブ鳥ノアスカ川ヨリ秋ハ往ニケリ
熊谷 直好

燈火ノ影ニテ見ルト思フ間ニ文ノ上白ク夜ハ明ケニケリ
香川 景樹

皆散リシ後ニ染メムトモミチ葉ノ淺キハ深キ心ナリケリ
本居 宣長

敷島ノ大和心ヲ人間ハ朝日ニ匂フ山櫻花
心セヨ霞モ深キ春ノ夜ハ月ダニ漏ラヌ須磨ノ關守

小澤 蘆庵

賤ガ女ノ門ノ乾瓜トリ入レヨ風ユフ立チテ雨コボレ來ヌ
渡殿ノトモシノ火影マダ、キテ夕風ナガラ映ス遺水

橘 千蔭

難波江ハ暮レ初メテナホ雪ノ色ニ夕ヲ殘ス淡路島山
夕風ニ來寄ル渚ノサ、ラ波水ニモ秋ノ聲ハ有リケリ

村田 春海

山櫻雪トモ見エヨ行ク雁ノ此處ヲ越路ト立チ留マルベク
心サヘ晴レ行ク空ノ涼シサハ風コソ月ノ光ナリケレ

加茂 眞淵

信濃ナル菅ノ荒野ヲ飛ブ鷺ノ翼モタワニ吹ク嵐カナ
不二山ヲ詠メル長歌一首及ソノ反歌

磯間ヨリソガヒニ見ユル駿河ノ海沖ツ波路ハ狭キカモフリ放ケ見レ
ハ相模根ノ八重山峰ハ低キカモ天ノ原ナル富士ノ嶺ノ麓ヲ出デ、風
ノマニ横折ル雲ニ駿河ノ海沖モカクロヒ相模根ノ峯モ雨フリ時ノ間

ニ雷モ鳴リ行ケド六月ノ照ル日ノ空ニアラハレテ曇ルトモ無ク常夏
ニ雪ゾ降リケル不二ノ高根ハ

不二ノ嶺ノ麓ヲ出デ、行ク雲ハ足柄山ノ峰ニカ、レリ

戸田 茂睡

身ニカヘテ惜ミシ家ノ名ヲダニモ捨ツレバ捨ツル世ニコソ有リケレ

僧 契冲

我コソハ蘆ノ下折レ一節ノ有リトモ誰カ有リト見ルベキ

下河邊長流

ツヒニ我著テモ歸ラヌ唐錦タツ田ヤ何ノ故郷ノ山

俳諧俳句

俳諧俳句ハ、平民文學トナリテ、流行ノ範圍廣マルニ從ヒ、漸
ク卑俗ニ陥リシガ、天明時代ニ大島蓼太・與謝蕪村等出デ、
一時ノ盛ヲ極メタリ、コトニ蕪村ノ清新警拔ナル詠ハ、今日

與謝蕪村

芭蕉ノ正
風體

宗因ノ檀
林派

貞徳ノ貞
門

新派ノ渴仰スル所ナリ。

ソノ前ニテハ元祿時代ヲ盛ナリトス、正風俳諧ノ祖松尾芭
蕉ノ出デタル時ナリ、芭蕉ハ伊賀ノ人ニテ、藤堂家ニ仕ヘシ
ガ、後世事ヲ棄テ、風月ヲ友トシ、時ノ俳諧ノ滑稽ヲノミ主
トセルヲ斥ケテ、幽玄ノ思想ヲ歌ヘリ、其一生ノ句ヲ集メタ
ルモノヲ一葉集トイフ、門人ニ其角・嵐雪等ノ名手アリ。

滑稽戲謔ヲ以テ俳諧ノ能事トセシハ、西山宗因ノ檀林派ナ
リ、而シテ宗因モ芭蕉モ俱ニ松永貞徳ノ孫弟子ナリ。

貞徳ハ御傘ヲ著シテ俳諧ノ法式ヲ定メタル人ニテ、又歌ニ
モ長ゼリ、ソノ流ヲ世ニ貞門トイフ。

俳諧ニハ歌仙・百韻等ノ別アリテ、長・短句ヲ交ル、附キ合
ハセ、其一卷ノ面ニ變化ヲ備ヘムコトヲ勉ムルモノナリシ
ガ、後ニハ發端ノ第一句ノミヲ獨立セシメテ、之ヲ俳句(發句)

狂歌狂句

俳文狂文

トイフニ至レリ。
 正式ノ歌俳句ニ伴ヒテ、又狂歌狂句トイフモノアリ。狂歌ハ蜀山人・宿屋飯盛鹿都部眞顔等ヲ巨擘トシ、狂句ハ柄井川柳ヲ名手トス、俱ニ寛政前後ヲ極盛トシ、其後ハ傑出セル人トテモナカリシガ、平民文學トシテ普ク世ニ流行セリ。
 俳諧狂歌ノ思想ハ、更ニ文章ト現レテ俳文トナリ、又狂文トナレリ。俳文ニハ横井也有ノ著セル鶉衣・森川許六ノ選ビタル風俗文選、狂文ニハ蜀山人ノ四方ノアカ手柄岡持ノ我面白等ヲ尤トナス。

燈火ヲ見レバ風アリ夜ノ雪
 春ノ海ヒネモスノタリ〜哉
 青梅ニ眉撥メタル美人カナ
 夕立ヤ家ヲ遠リテ驚鳴ク

大島 蓼太
 與謝 蕪村
 板本 其角

元日ヤ晴レテ雀ノ物語リ
 古池ヤ蛙飛ビ込ム水ノ音
 夏艸ヤツハモノ共ノ夢ノ跡
 枯枝ニ鳥ノトマリケリ秋ノ暮
 ヤガテ見ヨ棒クラハセン蕎麥ノ花
 杜宇イカニ鬼神モ慥ニ聽ケ
 月ヤアラヌ我身一ツノ影法師
 梅ガ香ニノツト日ノ出ル山路哉
 處々ニ雉子ノ啼キ立ツ
 家普請ヲ春ノ手透ニトリ付ケテ
 上ノ便リニ上ル米ノ直
 宵ノ内ハラ〜トセシ月ノ雲
 數越シ話ス秋ノサビシキ

服部 嵐雪
 松尾 芭蕉
 西山 宗因
 松永 貞徳
 芭蕉
 野 坡
 同 蕉
 同 坡
 同 蕉
 同 坡

斷酒辨

横井也

モトヨリ李杜ガ酒腸モナケレバ、上戸ノ目ニハ下戸ナリトイヘドモ、下戸ナル人ニハ、上戸トモイハレテ、酒ニ剛腸ノ座ヲ分テバ、自ラ飲ム人ノ方ニカズマヘラレテ、南郭ガ竿ヲフキケル程モ、思ヘバ四十ノ年ニモ近シ。サレバ、衆人ミナ酒臭シト、世ニ鼻覆ヒタル心ハ知ズ、マシテ五十ニシテ非ヲ知リシトカ、賢キ試シニハ比ヒモ似ズ、近キ頃、痛マシウ酒ノアタリケルマ、ニ、藻ニスム蟲ト思ヒタツ事アリテ、試ニ一月ノ飲ヲタテバ、身ハナラ柴ノ木下戸トナリテ、花ノ晨、月ノ夕、スクテモアラレケル者ヲト、始メテ夢ノサメシ心地ゾスル。ケフヨリ、春ノ蝶ノ醉心ヲ忘レ、秋ノ紅葉モ茶ノ下ニタキテ、長ク下戸ノ樂ニ老ヲ待ツベシ。サモアレ、此ノ誓ヒミタラシ川ニ御祓モセネバ、タトヘハ仙ノ一座ナリトモ、招カバ柳ノ青眼交リ、吸物サカナハ人ヨリモ荒シテ、同ジ醉郷ニ遊ブベクバ、イザ松ノ尾ノ山カラスモ、月ニハモト浮レ仲間ト思フベシ。

花アラハ花ノ留守セン下戸ヒトリ

月雪花

蜀山人

花ハサカリニ、月ハタマナキヲノミ、見ルモノカハト、ナラビガ岡ノスネモノハ、イヘレド、花ハ立春ヨリ七十五日、月ハ三五夜中ノ新月、後ノツキモ、タメデタシ。雪ハ豊年ノ貢物トハ云ヘド、跡クサラカシモウルサシト、明阿彌陀佛ノフミニモ書ケリ。ゲニ降ルトテモ、若菜ノ價タカウナラヌホドコソ、門田モル犬モ喜ブベケレ。

蜀山人

時鳥鳴キツル跡ニ呆レタル後徳大寺ノ有明ノ顔

宿屋飯盛

山吹ノハナガミバカリ金入レニミノヒトツダニナキゾ悲シキ
禍モ三年バカリ古壁ノ鼠穴ヨリ這入ル梅ガ香
アフクニモ餘ル團扇ノ涼風ハノリノ力カカミノ助カ

鹿都部眞顔

争ハヌ風ノ柳ノ絲ニコソ堪忍袋ヌフベカリケリ
オトガヒデ額ノ筆法ハネテ讀ミ

脚本ト淨瑠璃

脚本

今日コソ學者ニシテ脚本ヲ筆ニスルモノアレド、近世ノ脚本作者ハ、其地位頗ル卑ク、常ニ俳優ニ願使セラレタルヲ以テ、脚本モ從ヒテ野卑拙陋ノモノ多シ。但並木五瓶ノ金紋五山桐、鶴屋南北ノ四谷怪談等ハ名作ト稱セラル。

操ト淨瑠璃ト

今日ノ演劇ノ胚胎セシ所ハ、操人形ヲ用非テ、今ノ俳優ノナシ、所ヲ爲サシメタルニ在リ。コノ操ニ伴ヘル淨瑠璃ハ殆ド律語ノ形ヲナセリ。而シテ操ハ安永、明和ニ至リテ衰へ、今日ノ演劇ノ世トナリタルガ故ニ、淨瑠璃ノ作モコ、ニ絶エヌ。其頃ノ淨瑠璃本ハ俗ニ丸本トイフモノニテ、大序ヨリ大團圓マデ七段、九段、十一段ノ長キニ亘レリ。並木宗輔ノ一谷

淨瑠璃作者

近松門左衛門ト竹本義太夫

三絃ノ渡來

嫩軍記、近松半二ノ妹脊山婦女庭訓、關取千兩、職等有名ナリ。又假名手本忠臣藏、義經千本櫻、菅原傳授手習鑑ハ半二ノ師ナル竹田出雲ノ作ニシテ、此出雲ノ師コソ近松門左衛門巢林子ナレ。

門左衛門ハ相森信盛トイヒ長州ノ人、京都ニ出デ、文筆ヲ樂ミシガ、淨瑠璃節ノ名人竹本義太夫ノ需メニ應ジテ、數十部ノ戯曲ヲ著シタリ。時代物ニハ國姓爺合戰、曾我會稽山等、世話物ニハ心中天網島、女殺油地獄、鎗權三重帷子等ヲ尤トス。何レモ能ク人情ノ祕奧ヲ穿チ、文藻ハタ豊麗富贍ナリ。而シテ此頃ノ時代物ハ多ク五段物ナリ。

門左衛門以前ニハ、金平本トイフモノアレドモ、頗ル幼稚ナル鬼神退治談ニ過ギザリキ。抑三味線ノ渡來以前ヨリ既ニ淨瑠璃十二段草子ノ類ヲ扇拍子ニテ語ルコトアリシガ、之

ヲ三絃ニ和シテ語ルニ至リテ、大ニ世ニモテハヤサレ、淨瑠璃ハ終ニコノ種類ノ汎稱トナルニ至リタルナリ。

出世景清ノ一節

近松門左衛門

サテ(頼朝)御土器賜ハリ、諸國ノ大名殘リナク皆々杯サシ給フ。重忠仰セケルハ、カ、ルメデタキ折トイヒ、且ハ我君御慰ミノ爲、吾殿屋島ニテ功名ノ様子語ツテ聞カセ給ヘ、内々君モ御所望アリシゾ、平ニ平ニト有リケレバ、頼朝公ヲ始メ參ラセ満座ノ人々一同ニ、ハヤ、疾ク疾クト望マル、景清辭スルニ、及バネバ、袴ノ裾ヲ高ク取り、御前ニ色代シ、過ギシ昔ヲ語リケル、イデ其頃ハ壽永三年三月下旬ノ事ナリシニ、平家ハ船源氏ハ陸兩陣ヲ海岸ニ分ツテ互ニ勝負ヲ決セムト欲ス、能登守教經イフヤウ、去年播磨ノ室山、備中ノ水島、鷓越ニ至ルマデ一度モ味方ノ利ナカリシコト、偏ニ義經ガ謀イミジキニ依ツテナリ、如何ニモシテ九郎ヲ打チ取ル謀コソ有ラマホシケレ、トノタマヘバ、景清心ニ思フヤウ、判官ナレバトテ、鬼神ニテモアラバコソ、命ヲ捨テバ易カリナント、教經ニ最後ノ暇乞

ヒ、陸ニ上レバ源氏ノ兵餘スマジトゾ驅ケ向フ、景清之ヲ見テ物々シヤト、夕日影ニ打物ヒラメカイテ、切ツテ掛カレバ、コラヘズシテ、又向イタル兵モ四方ヘバツトゾ遁ゲニケル。サモシヤ方々ヨ、源平互ニ見ル目モ恥シ、一人ヲ止メンコトハ案ノウチ、物小脇ニカイ込デ、某ハ平家ノ侍景清ト名乗リカケ、手取ニンセト追ウテ行ク。三保ノ谷ガ著タリケル兜ノ鍔ヲ取り外シ、二三度遁ゲ延ビタレドモ、思フ敵ナレバ遁ガサジト飛ビカ、リ兜ヲ押ツ取り、エイヤト引ク沙ニ鍔ハ切レテ此方ニ止マレバ、主ハ先ヘ遁ゲ延ビヌ。遙ニ隔テ、立チ歸リ、然ルニテモ汝、恐シヤ腕ノ強キトイヒケレバ、景清ハ三保ノ谷ガ首ノ骨コソ強ケレト笑ツテ左右ヘ退キニケル。昔ヲ忘レヌ物語御恥シウ候フ、ト語リ給ヘバ、人々ハ一度ニドツトゾ感ジケル。斯クテ我君御座ヲ立タセ給ヒケレバ、大名小名續イテ座敷ヲ立チ給フ。景清君ノ御背姿ヲツク、ト見テ、腰ノ刀ヲスルリト抜キ、一文字ニ飛ビカ、ル、各コレハ、ト氣色ヲカヘ、太刀ノ柄ニ手ヲ掛クレバ、景清シヅツテ太刀ヲ捨テ五體ヲ抛チ、涙ヲ流シ、ア、南無三寶、アサマシヤ、イズレモ聞イテ給ハレ、カクアリ難キ御恩賞受ケナ

ガラ、凡夫心ノ悲シサハ、昔ニ返ル恨ノ一念、御姿ヲ見申セバ、主君ノカタキナルモノヲト、當座ノ御恩ハ早忘レ、尾籠ノ振舞、面目無ヤ、眞平御免被ラン、誠ニ人ノ習ニテ心ニ任セヌ人心、今ヨリ後モ我ト吾身ヲ諫ムルトモ、君ヲ拜ム度毎ニトテモ此所存ハ止ミ申サズ、却ツテ仇トヤ成リ申サント、トカク此兩眼ノ有ル故ナレバ、今ヨリ君ヲ見ヌヤウニ、トイヒモ敢ヘズ、刺添拔キ……………

丹波與作ノ一節

「コ、ヘ來イ與之助、ト引キ寄セテ、兩手ヲ取り、サテモ大キウ成ツタノ、トテモ成人セウナラバ、侍ラシウナゼ尋常ニモ育タヌゾ。顔ノ道具、手足マデ、母ハ斯ウハ生ミ付ケヌ、ウツクシイ黒髮ヲ、此様ニ剃リ下ゲテ、手足ハ山ノコケ猿ヂヤ。ホンニ^ニ氏ヨリ育チゾ、ト又サメトト泣キケルガ、コレ物ヲ合點シヤ、腹カラ産ンダハ産ンダケレドモ、今デハ子デモ母デモナイ、淺マシウ成リサガツタヲ、嫌ウテ云ウデハサラ〜無イ(中略)サア早ウ御門へ出ヤ、ア、イカナル因果ナ生レ性、現在我子ニ馬追サセ、男ノ行方モ知ラス身ガ、母ハ衣裳ヲ著飾リテ、御乳ノ人ヨ、御局ヨト、玉ノ與ニ乘

ツタトテ、是ガ何ニ成ルコト、ト聲ヲ忍ビニ泣クバカリ。子ハ生レツキ賢クテ、聞キソケアルホド尙泣キ入り、悲シウ話ヲ聞キマシタ、サリナガラ常ニ乳母ガ申シタハ、^ニ姫君様ト私トハ、乳兄弟ノコトナレバ、カ、様ニサヘ逢ウタラバ、父様モ出世ナサル、由御訴認成サレテ下サレカシ、ト云ヘバ、チャツト口ヲ押ヘ、ア、ア、勿體ナイ、其乳兄弟云ハスコト、姫君様ハ關東へ養子嫁御ニ御下リ、高イモ低イモ姫ゴゼハ大事ノ者、先ハ他人ノ世間體、三吉、トイア馬追ガ、乳兄弟ニ有ルナド、ドウ妨ニナラウヤラ、蟻ノ穴カラ堤モ崩レル、輕イ様デ重イコト、ヒソ〜云ウテ人モ聞ク、先早ウ出テクレ、ト泣ク〜云ヘバ、三吉、ア、カ、様アンマリ遠慮過ギマシタ、先云ウテ見テ下サレ、マダ云ヒ居ルカ聞キソケナイ、夫ノコト、我子ノコト母ニ如在ガ有ルモノカ、合點ノ惡イ、聞キソケナイ、ト制スル中ニ、奥ヨリモ、御乳ノ人ハドコニゾ、御前カラ召シマス、ト呼バ、レバ、アレ聞キヤ、人ガ來ル、出テタモ、ト手ヲ取ツテ引キ出ス。不便ヤ三吉シク〜涙、頬冠リシテ目ヲ隠シ、沓見マツベテ腰ニ附ケ、見スボラシゲナ後影、コリヤマ一度コチラ向キヤ、山川デ怪我シヤンナ、雨風雪降り、夜道ニハ、腹ガ

痛イト作病起シ、二日モ三日モ休ンデ煩ハヌ様ニシテタモ毒ナ物喰ハズニ、下痢ヤ麻疹ノ用心シヤ、可愛ノナリヤイタクシヤ、千三百石ノ代取ガ何ノ罰ゾ科メゾ、ト式葬ノ段箱ニ身ヲ抛テテ歎キシガ、懐中ノアリ合フ一步、十三帛紗ニ包ミ、コレ、タシナミニ持ツテ居ヤ、ト涙ナガラニ渡サル、三吉見返リ恨メシゲニ、母デモ子デモナイナラバ、病マウト死ナウトイラス御構ヒ、其一步モイラス、馬方コソスレ伊達ノ與作ガ總領チヤ、母様デモナイ他人ニ金貰ハウ筈ガ無い、エ、胸慾ナ母様覺エテ居サツシヤレ、トワツト泣キ出ス其有様母ハ魂消エ入リテ、養ヒ君御家ノ御恩思ハズバ、サテ一人子ヲ手放シテ何ノ遣ラウゾ、奉公ノ身ノ淺マシヤト、モダエ焦ガレテ歎キケル時ニ、奥口サミメイテ、早御立、ト姫君ノ輿昇キ上ゲ行列立テ、御乳ノ人ノ乗物ヲヒラ附ニコソ昇キ寄セケレ。御乳ハサアラヌ顔付シテ、姫君ノ御伽ニ最前ノ馬方ヲ此乗物ニ引キ付ケ、御慰ミニ唄ハシヤ、恐ツタ、ト宰領共、コリヤ其處ナ自然箸メ、唄ヒ居ラウ、トギゴツナク、ヤア、コイツハ吹エ居ルカ、何チヤ、コリヤ忌々シイ、ト握リ拳ヲ二ツ三ツ戴キナガラ、泣聲ニ、坂ハ照ルル、鈴鹿ハ曇ル、土山アヒノ

土山雨ガ降ル、フル雨ヨリモ親子ノ涙、中ニシグル、雨宿リ……

擬古文 國學ノ發達

本居久米翁等ノ擬古文ガ、明治今日ノ文壇ニ咲キ殘レルハ、其根ガシ近世ニアリ。蓋シ其頃ノ國文學者ハ、擬古文ニアラズンバ、文章ノ如クニ思ハザリシナリ。

近世ノ末葉ニ橘守部アリ、文章撰格、長歌撰格ノ外、稜威言別、神樂催馬樂入綾等ヲ著シテ、歌文俱ニ長シタリ。之ニ先ダチテ高田與清、伴信友、平田篤胤ハ天保三大家ノ稱アリ、信友ハ考證ニ長シ、與清ハ水戸齊昭ノ命ヲウケテ、八洲文藻ヲ撰ビ、篤胤ハ盛ニ神道ヲ發揮シタリ、此信友、篤胤ハ俱ニ本居宣長歿後ノ門人ナリ。宣長ノ門ヨリ出デ、擬古文ニ秀デシハ、吉備津ノ宮ノ祠官

天保ノ三
大家

高尙ト濱
臣ト

群書類從

縣居門ノ
三傑

古事記傳

藤井高尙ニシテ、松屋文集卷四アリ、又伊勢物語新釋ヲ著ス。此
時江戸ニ清水濱臣アリ、(泊泊舍文集卷六アリ)村田春海ニ學ビ
テ、文名高尙ト相下ラズ。又群書類從ノ著者塙保己一及本居
春庭等アリ。但シ春庭ハ宣長ノ子ナリ。
宣長ニ春海ニ橘千蔭ヲ合セテ、縣居門ノ三傑ト稱ス。春海ハ
頗ル漢學ニモ通ジタレバ、文ヲ行ルニ漢文ノ法ヲ應用シテ、
布置整然タリ。其歌文ノ集ヲ琴後集トイフ。千蔭ハ狂歌・狂文
ヲヨクシ、其擬古文亦有名ナリ。尤ガ花入卷ヲソノ集トス。又
萬葉集略解ヲ著シテ、世ニ重セララル。宣長ハ伊勢松坂ノ人、鈴
屋ト號ス、二十七歳ニ始メテ古學ニ志シ、贊ヲ加茂眞淵ニ執
リ、博學高識一世ニ秀デ、語學・文學・音韻・歴史ノ諸方面ニ涉リ
テ著述多ク、門ニ入りタル者六百人ニ上レリト云フ。其著古
事記傳・歷朝詔詞解・玉の小琴・玉の小櫛・美濃ノ家苞等アリ。就

加茂眞淵

白河樂翁

荷田春滿

中記傳ハ、三十五年間ノ心血ヲ注ギタル著書ニシテ、ワガ國
ニ於ケル上古史ノ研究ハ、之ニ由リテ始メテ知ラル、ナリ。
眞淵ハ遠江ノ人、年三十七ニシテ、荷田春滿ノ門ニ入り、國學
ヲ修メ、後江戸ニ出デ、教授シ、縣居ト稱セリ。コノ眞淵ノ東
下ハ、文學ノ中心ヲ江戸ニ移サシメタル動機トナレリ。晚年
田安宗武ニ聘セラレテヨリ、其名益高カリキ。歌ハ萬葉ヲ祖
述シ、文ハ能ク祝詞等ノ雄大ナル趣ヲ得タリ。蓋シ國文學者
ガ專ラ擬古文ヲ書スルニ至リシハ、全ク眞淵ガコノ感化ナ
ルベシ。宗武ノ子松平定信ハ、即チ白河樂翁ニテ、文事ニ秀デ、
其隨筆花月艸紙ナド有名ナリ。眞淵ニハ萬葉考・祝詞考・冠辭
考・神樂催馬樂考等ノ著アリ。
春滿ハ京都稻荷山ノ祠官ナリ、國史・律令・古文・古歌何レモ精
通セザルハナク、特ニ神代史ト萬葉集トニハ、創見アリタリ

トイフ。晩年國學ノ學校ヲ建テムトセシコト、終生戀歌ヲ詠マザリシコト、ハ其人トナリヲ知ルニ足ラム。其子在滿モ亦名アリ。

長流ト契
沖

萬葉集ノ秘ヲ開キタルモノハ、カノ僧契沖ノ代匠記トス。契沖ハ攝津ノ人、難波ノ圓珠庵ニ住メリ。其友下河邊長流水戸光圀ノ命ニヨリテ、萬葉集ヲ註シツ、アリシガ、未ダ畢ヘズシテ死シタリシカバ、其後ヲ繼ギテ完成シタリ。代匠記ト云フ者即是ナリ。又古今餘材抄等ノ著アリ。抑光圀ハ身親藩ノ貴ニ居リテ深ク文事ヲ好ミシ故、史館ヲ開キテ大日本史ヲ撰シ、又禮儀類典・扶桑拾葉集等ヲ編セリ。

徳川光圀

北村季吟

此時江戸ニモ亦大註釋家アリ、北村季吟トイヒテ、俳諧ヲ能クス。彼ノ芭蕉ノ師事セシハ此人ナリ。萬葉集拾穂抄・八代集抄・源氏物語・湖月抄・枕草子・春曙抄・伊勢物語抄・大和物語抄・土

文法ノ研
究

佐日記抄・徒然草文段抄・和漢朗詠集々註等、各古來ノ諸註ヲ集メテ、忠實ニ註疏セシ者。サレバ今モナホ湖月抄・春曙抄ノ右ニ出ヅルモノハ、多クアラザルベシ。

古文學ノ研究諸種ノ方面ニ起ルト共ニ、今日イハユル國文法ノ基モ成リヌ。春庭ガ詞ノ八衢・詞ノ通路・オヨビ宣長ノ門人鈴木朗ガ雅語音聲考・僧義門ガ山口葉・玉ノ緒・線分・活語雜話ノ如キ是ナリ。然レドモ是等ノ基トナリシモノハ、宣長ガ詞ノ玉緒・御國詞活用抄等ナリ。玉ノ緒ト同時ニ同様ナル研究ヲ異リタル方面ヨリ成シタルモノニハ、あゆひ抄・かざし抄アリ。コハ富士谷成章ノ著ニシテ、玉ノ緒ヨリモ寧ロ精密ナリト稱セラレ。

假名遣

字音ノ研究ハ、宣長ガ漢字三音考・字音假字用格等先ヅ出デ、義門ノ男信等ノ研究ヲ經テ、今日ノ字音假字遣トナリ、字訓

ハ亦契沖ノ和字正濫要略ニテ其假字遺復古セラレ眞淵ノ門人楫取魚彦ノ古言梯ニテ之ヲ大成セリ。コレニツレテ辭書モ亦世ニ出デタリ。石川雅望ノ雅言集覽。谷川士清ノ和訓栞等コレナリ。士清ハ又日本書紀通證ヲ著シ雅望ハカノ狂歌師ノ宿屋飯盛ヲ以テ名ヲ知ラル。

俗神道大意ノ一節

平田篤胤

後世ニハ比叡ノ山トイヘバ延曆寺ノコト、ノミ心得又日吉ヲヒヨシト唱ヘテトント別ノ様ニ成ツタガ古ヘハ日吉ヲ書イテモ唱ハヤハリヒエデヒヨシト云ヒタルコトハ更ニ無イ。又最澄法師ガ此山ニ佛寺ヲ建テ日吉神社ヲバ其寺ノ守神ノ如ク云ヒ做シ山王ト云フ名ヲサヘニ負セ奉ツタルニ依ツテ今世ニ至ツテハ其ヒヨシト云フ名サヘ人ハ知ラヌ様ニタゞ山王トノミ申スデヤ。カクテ最澄法師ガ此御山ニ寺ヲ建テ大山昨神ヲ山王ト申シタル其妄説ハドウヂヤト申スニ最澄或時小

比叡峰ニ上ツタル時ニ日輪ノ如キ三ツノ光が見エルカラ能ク見レバ其中ニ釋迦ト藥師ト彌陀ノ像ガアリト現レタル故其名ヲ問ヒタレバ答ヘテ云フニハ、豎ノ三點ニ横ノ一點ヲ加ヘ横ノ三點ニ豎ノ一點ヲ添フルト云ヒ畢ツテ其光ガ空ニ昇ツテ去ツタル故其言ヲ文字ノ上ニ考ヘテ見ルト、豎ノ三點ニ横ノ一點ヲ加フレバ山ノ字トナリ横ノ三點ニ豎ノ一點ヲ添フレバ王ノ字トナルコトニ於テツラク思ヘバ高大ニシテ動カザルハ山ナリ又天地人ノ三才ヲ經緯スル者ハ王ヂヤニ依ツテ此神ヲ山王ト名ヅケタト云フコト。トント此豎ノ三點横ノ三點ナド云フ偽リ言ハ所謂ナゾクデ彼アサツテアタゴマキリトイフ謎ヲ玉子ト解キタイコイヌイテバナカニオクトイフ謎ヲタバコト解クナドイフ類デ若輩ナ説ヂヤ又釋迦ヤ阿彌陀ガ天竺カラ來テ漢文學ノ謎ヲガケテ行クコトモナイ何トカ云ヒ様モ有リサウナモノダガ是デ最澄ガ學問ノ程モ知ラルコトヂヤ。

清水濱臣ヘノ答書

石川雅望

御手書奉拜誦候、秋暑甚敷御座候へ共、御安全被成御座奉察喜候、小子先月九日ヨリ、痢病ヲ病ミ候ウテ、當月上旬又々疝積ニ相カハリ、骨節疼痛未ダ平臥罷在候、其故ニ御返書ハ不奉呈大ニ背本意候、御容恕可被下候。サテ逐一被仰聞候趣拜讀仕候、誠ニ御文章ト申シ、御學問ノ深遠ナル事實ニ感服仕候、老朽ナド一言ヲ聞エ奉ルベキ道理無之、奉恐入候事共ニテ候、右言語ノ中存ジ附キ候事共モ有之候ハ、申上候様ニ被仰聞候サレド皆僻言共ニテ御耳ニ觸レ候事ナドニハ無之候へ共、此御返書又々延引ニ成リ候事、失禮ト存ジ候故、病中強テ筆ヲ執リ申候、誠ニ手フルヘ候テ更ニ動キ不申候、其上息切レ候ウテ机ニ向ヒガタキ様ニ覺エ候へ共、忍ビツ、認メ御覽ニ入レ候、定メテ見惡キ事共ニ候ハムト存候。

◎ケイメイ (云々)

◎ケウサウ (云々)

◎イカウ 宣長ガ聞エ難キ詞ナリト註シ候ハ考足ラヌ事ト存候。此詞數多見エテ候ヲ心附カザリシニヤ、玉葛ニイカウニ仕ヘマツルベクナム夕霧ニ彼君ノ御タメノ事ハ修法ヲナム、故大宮ノ宣ヒ附

ケタリシカバ、イカウニ然ルベキ事今ニ承ル所ナレドト有之候テ、田舎人法師ノタグヒノ詞ニ用キテ候、宇都保サガノ院ニ彼ヲバ君ニ預ケ奉リテイカウニ此事ヲ後見奉ラム又落窪物語ニ典藥來レバコチイマセト呼ビ給ヘバ、フト寄りタリ、云々、御病モフト止メ奉リテ、今宵ヨリハイカウニ相頼ミ給ヘトテ同書、オノレイカウニ知リ聞エムナド方々ニ見エテヒタスララ字音ニ一向ト申事ト被存候。此外後世ノ軍物語ニハ數多見エ候。

◎フシヤウ 是ニ不調ノ字ヲアテ候ハ僻事ト存候。此語野分ノ卷ヲノミ見候テモ能ク聞エ候詞ト存候。カノ卷ニイトフテウナル娘設ケ侍リテモテ煩ヒ侍リヌト憂ヘ聞エ給ヒテ笑ヒ給フ、宮イデアナアヤシ、娘トイフ名ハシテサガナル様ヤ有ルトノタマヘバ云々、此大宮ノ詞ノサガナシトノ給ヒシハ、不祥ノ字ト存候、神代紀ニ不祥ヲサガナシト讀ミテ點有之候、源平盛衰記卷十九、ワコゼガ不祥盛遠ガ不祥、渡ガ不祥、三ノ不祥ガ一度ニ來ルベキ宿習ニテコソ有リツラメトアルモ同語ニテ候、サレバフテウト書候テハ字音ヲ誤

候ニテ、フシヤウト云フベキ事ト存候、不祥ノ字日本紀ノ訓ノ如ク「サガナシ」ニテ能ク通シ申候様ニ存候、マシテ野分ノ卷ナル宮ノ詞ニ「サガナカル様ヤ有ル」ト答へ給ヘルニヨレバ不調ニテ有ラヌコトシルク候。モトハ左傳僖公三年ニ見エ候文字トオボエ申候。(云々)病中手フルヘ候テ思フ事十ガ一モ書取リカネ候、猶快氣ノ上可申述候、御覽ノ上丙丁ニ御投可被下候。

七月十二日

清水ノ君

雅 望拜

萬葉歌人ノ評

賀茂 眞淵

柿本朝臣人麻呂ハ、古ナラズ後ナラズ、一人ノ姿ニシテ荒魂和魂イタラヌ隈ナムナキ、其長歌勢ハ雲風ニ乘リテミ、空行ク龍ノ如ク、言ハ大海ノ原ニ八百潮ノ湧クガ如シ。短歌ノ詞ハ葛城製津彦眞弓ヲヒキ鳴サムナセリ。深キ悲ヲ云フ時ハ千早振モノヲモ泣ガシムベシ。山上臣憶良ハ調フツ、カニシテ心ウツクシク、久米ノ伴ノ雄々シキ姿シテ、タツ、舞セ

ラレ思ホエ、短歌ノ中ニタゞ言ニイヘルハ、イフベクモ無シ。山部宿禰赤人ハ、人麻呂トウラウヘナリ、長歌ハ心モ詞モタゞニ清ララ、盡セリ。短歌コソ是モ一人ノ姿ナレ、巧ヲ成サズアルガマニ、云ヒタルガ、妙ナル歌トナリニシハ、モトノ心ノ高キガイタリナリ。タトヘバ檳榔ノ車シテ大路ヲ渡ル主ノアカラ目モセヌガ如シ。大伴宿禰旅人ノマヘツ君ノ短歌ハ、雄々シクテ悲シ、酒ヲヨメルニ皇御國ノ心ヲ云ヘルハ貴シ、コハ調ラステ、心ヲゾ取ルベキ、長キハ知ラズ、ソレガ嗣ナル家持ノ主ハ事ヲヨクシルシテ句ナシ、タトヘバ行幸ノ大御伴ノツラヲメダク記セル文ノ如シ。短歌ハイト多カレド荒ビテウラクハシキハ稀ニナム有ル。

和漢混和文 漢學ノ隆盛

イカニ漢文ニ堪能ナル人ニテモ、漢文サマデ盛ナラザル讀書社會ニ向ヒテ、言ヲ立テ書ヲ著サムトスルニハ、勢ヒ漢字交リ文ヲ用非ザルヲ得ズ。コレ近世ノ初半ニ和漢混和文ノ盛ナリシ故ナリ。太田錦城ノ梧窓漫筆、湯淺常山ノ常山紀談、

太宰春臺ノ經濟錄・獨語・荻生徂徠ノ政談・南留別志・伊藤東涯ノ秉燭譚・熊澤蕃山ノ集義和書・外書等有名ナレドモ、最モ此文體ニ長シタルハ室鳩巢・新井白石及ビ貝原益軒等ノ三人ナリ。

鳩巢ト白石

鳩巢・白石ハ俱ニ木下順庵ノ門ヨリ出ヅ。鳩巢名ハ直清、八代將軍吉宗ニ信セラレテ、屢政事ノ得失ヲ諮詢セラル。白石名ハ君美、六代將軍家宣ニ仕ヘテ、大ニ政事ノ改革ヲ企劃ス。鳩巢ノ駿臺雜話ハ、病間ニ修身ノ益トナルベキ事ヲ集メテ、吉宗ニ上リタル者。白石ノ藩翰譜ハ、甲府ニテ三百三十七諸侯ヲ傳シテ、家宣ニ奉リタル者。又白石ノ讀史餘論ハ、家宣ノ命ニ應ジ、歴史ニヨリテ古今ノ盛衰得失ヲ論シタル稿本。而シテ其折焚シ柴ノ記ハ、自己ガ生ヒ立ヨリ老後迄ノ自傳ニシテ、鳩巢ノ鳩巢小説ハ、白石等トノ談話ヲ記シタル者ナリ。

益軒

白石ハ古今無比ノ著述家ニシテ、稿ヲ脱セザルモノヲ併スレバ、凡ソ三百種ニモ上ルベシ。其豐富ナル學植ハ、上ニ記セルモノ、外ニ、語學ニ東雅アリ、文學ニ同文通考アリ、マタ洋學ノ端緒ヲ開キタル采覽異言、西洋紀聞アレバ、神代史ニ新見ヲ立テタル古史通アリ。

著書ノ數ニテ、白石ニ匹敵スベキハ、貝原益軒ナリ。名ハ篤信、福岡黒田家ノ世臣ニテ、後帷ヲ京師ニ下シヌ。教訓書ニ大和俗訓、養生訓、家道訓、博物ニ大和本草、花譜、紀行ニ京廻リ、大和廻リ、岐蘇路ノ記等アリ。益軒ガ斯ク教訓書ヲ此文體ニテ書キタリシハ、最モ能ク此文體ノ無カルベカラザル所以ヲ自ラ説明セルモノト云フベシ。

此ニ少シク當代漢學ノ模様ヲ述ベム。儒學ノ孔孟ヲ宗トセシハ、千古一轍ナレドモ、漢唐ニ古注疏アリ、宋ニ程・朱理氣ノ

折衷學派

說アリ、明ニ餘姚良知ノ說ナドアリテ、其旨ヲ敷衍スル上ニ、
自ラ出入アリシガ、清朝ニ至リテ、又考證ノ學起レリ。

吾國ニテハ、天明ノ頃、井上金峨出デ、訓詁ハ漢唐ノ注疏ニ
據リ、義理ハ宋明ノ諸家ヲ擇ビテ說ヲ成セリ、之ヲ折衷學派
トイフ。錦城モ亦コノ派ニ屬ス。是ヨリ先キ、徂徠アリテ道ハ
禮樂ニ外ナラズトシ、以テ宋儒理氣ノ說ヲ排シ、且ツ論語徵
ヲ著スヤ、專ラ古辭古義ニ證シテ說ヲ立テタリ。之ヲ古文辭

古文辭學派

學派ト云フ。但シ古文辭學トハ、明ノ李、王古文辭ノ說ヲ主張
セシヨリ、負ヒタル名ナリ。而シテ此古文辭ノ說ヲ論破セシ
ハ、山本北山等ヲ主トシ、之ヨリ文ヲ學ブモノハ、必ズ唐宋八
家ヲ宗トスルニ至レリ。又東涯ノ父ヲ仁齋ト云フ、論孟古義
等ヲ著シテ始メテ宋儒ノ說ヲ疑ヒヌ。堀河學派(古學)之ヨリ
起ル。中江藤樹ハ餘姚ノ學ヲ傳ヘ、蕃山ソノ門ヨリ出ヅ。斯ク

古學派

陽明學派

宋學

學問ノ分派ヲ見ルハ、漢學ガ隆盛ナリシ結果トハ云ヘ、マタ
幕府ガ林氏ヲ儒官トシテ、程、朱ノ學ヲ崇ビシ、反動ニモ由ラ
ズバアラズ。林氏ハ道春ヲ祖トシ、學和漢ヲ兼ネ、家康ヲ助ケ
テ三百年ノ文教ヲ開ケル人ナリ。

近世ノ後半ニハ、詩文大ニ興リ、漢學者ハ專ラ漢文ヲ用井ル
ニ至リシカバ、和漢混和文ノ名著ハ絶エタリ。然レドモ菅茶
山、廣瀨淡窓、梁川星巖ノ詩、佐藤一齋、賴山陽、鹽谷宕陰、安井息
軒ノ文ナド出デ、開闢以來ノ蔚盛ヲ極メタリ。

室鳩巢ニ與フル書

新井白石

昨日ノ御報拜誦驚愕、是非ニ及バズ候、然リト雖モ火急ノ處ニ御全家御
異狀ナキコトヲ、此上ノ多幸ト思召サルベク候。但シ惜ムベキコトハ、多
年御拮据候ウテ御求メ得シ御書籍ト御手録トノ事、承リ候ダニ心ヲ苦
メ候。是モ身ヨリ外ノモノ是非ニ及バズ候。貴兄既ニ御學業モ成就候ヘ

ハ、是ヨリ後書籍ヲ頼ミテ頼マヌ事ニ候。令郎未ダ御學問未成業ノ御事ニ候ヘバ、セメテ書籍ヲ御殘シ候御計ラヒノ事強チニ俗輩買田問舍等ノ事ニ比スベカラズ候。某家藏ノ書固ヨリ多カラズ候ヘドモ、二重ニナリ候物少々之アリ候。書目ノ簿モ何ノ内ニヤラム入レ置キ候故、昨夜尋ネ候ヘドモ知レズ候。サレド覺エ候處ハ、監本四書、茅鹿門史記、漢書ナド之アリ候。即令郎へ之ヲ進ズベク候。此外ノ書恩賜ノ物ノ外ハ、何ニテモ御用次第御貸シ申スベク候。御事モ闕カセマジク候。此節モ手前ノ事御物語申候ヒシ通、十分ナル御用ニハ立チ候ハネドモ、聊位ハ恩賜ノ物猶之アルベク候。御心置ナク仰セ下サルベク候。廉潔ヲ立テ候フモ事ニモヨリ相手ニモヨリ候。尋常同門モ兄弟ノ親ニ同ジク候。況ヤ曾ニ同門ト申スバカリニモ之ナク、秦風與子同袍ト申スハ、此事ニ候。仰セ下サルル少シモ、御耻カシカルベキ事ニモナク候。早々。

常盤抱孤圖

梁川 星巖

雪壓笠檐風卷袂、呱呱索乳若何情。他年鐵拐峯頭險、叱咤三軍是此聲。

七星潭客舍題壁

十年漂泊關之左、又逐驚蓬到海南。裘敝馬疲貧似故、蟬吟葉墜感何堪。豐城寶劍雖無識、水府明珠儘可探。昨夜清商聲徹曉、霜華吹落七星潭。

不識庵繫機山圖

賴 山 陽

鞭聲蕭々夜過河、曉見千兵擁大牙。遺恨十年磨一劍、流星光底逸長蛇。

鏡西八郎歌

兩日爭天天無光、擬射一日墮扶桑。誰掣吾肘不得發、黑風壓城劍折銛。堂々源家第八郎、射可射羿猿臂長。架狗吠堯豈得已、猶勝伯也學豺狼。琉球彈丸不足當吾大羽箭、聊且弋取救死亡。蠻首納女留將種、熊入夢啼嗶々。符力類父好身手、誅賊有國真天王。賴生南遊薩山陽、偶與蠻客同夜航。爲說大廟祝始祖、春禱秋嘗簇冠裳。境公一官睡不顧、絕悔雲浪自龍驤。縱使公助乃姪起、何當十郎自郎當。雞口牛後公所擇、一鎬破得南天荒。却有姪孫開封疆、隔海魯衛並永昌。津宗慶澤何橫溢、非綠源泉分天潢。唯恨封冊由殊俗、使公有知。瞋眼張作歌、屬客々已睡。女牛低地海茫茫。

宿生田

菅 茶 山

千歲恩讎兩不存，風雲長爲弔忠魂。客窗一夜聞松籟，月暗楠公墓畔村。

開元琴歌

雷珽之琴希代寶，見今珍藏在何邊。大和古剎富古器，不許世人容易看。千請萬懇誰開庫，源生奇士得奇緣。勦髹半剝梅花斲，冰色偏昏流水絃。書曰於九龍縣造，開元十二乙丑年。廣狹脩短手自量，清獨吟猱手自彈。模貌歸家亟經始，腹背一一典刑全。勝流相傳稱雅學，一時衆口藉々然。從此四方爭做造，選匠擇材不擇錢。此琴當代稱難得，何論五季二宋間。不意殊域萬里外，永鎮風象在荒山。後千餘歲遇知己，始將裝洋布人寰。維吾皇統垂無極，國無異姓仕世官。中古教化號隆盛，樂律和協禮儀端。無乃靈物尋靈地，乘桴遙向日東天。及至騷擾深晦迹，有待時運漸循環。先生所蓄亦雷樣，音其古淡貌其妍。余今對此心多感，長句不覺醉語頽。維昔李唐全盛日，歲修鄰好通使船。滄波浩蕩如衽席，生徒留學動百千。吉備研究慮鄭學，朝衡唱酬李杜篇。此時典籍多越海，豈止服玩與豆籩。一朝胡塵塞道路，彼此消息雲濤懸。鴉兒北歸郡國裂，白雁南渡衣冠彈。我亦王綱一解紐，五雲迷亂兵燹烟。壇浦魚腹葬劍璽，芳河花草埋錫鑾。禍水有源言之醜，涓滴積成百尋淵。爾來豪右耽爭鬪，人枕銀冑席

金鞍文物灰滅無餘燼，鐘簾羊存屬等閑。娼妓流歌將校帳，俳優戲舞王侯筵。最恨軍府創新式，衣斷双袖頭免冠。雅變風變同一轍，時往事往誰追還。幸今昇平人好古，朝野往々出才賢。若教清廟陳瑚璉，重見薰風被山川。撫罷根乎獲綠服，松聲斷續冬夜闌。

桂林莊雜詠示諸生

廣瀨 淡窓

休道他鄉多苦辛，同袍有友自相親。柴扉曉出霜如雪，君汲泉流我拾薪。

論詩贈小關長卿中島子玉

歌詩寫情性，實隨民俗移。風雅非一體，古今固多岐。作家達時變，沿革互有之。苟存敦厚旨，風教可維持。昔當室町氏，禮樂屬禪緇。江都開昭運，數公建堂基。氣初除蕪筍，舌漸滌侏儻。猶是螺蛤味，難比宗廟饗。正亨多大家，森々列鼓旗。優游兩漢域，出入三唐籬。格調務摹倣，性靈却蔽虧。里贖自謂美，本非傾國姿。天明又一變，趙宋奉爲師。風塵拂陳語，花草抽新思。雖裁放辟志，轉習滌哇辭。楚齊交失矣，誰識烏雌雄。寄言關及島，更張良在茲。雞口與牛後，趨舍君自知。我亦丈夫也，李杜彼爲誰。誰明六義要，以起一時衰。

小説

坪内逍遙氏ガ小説神髓ヲ著シテ文學ノ本領ヲ論ゼラレシヨリ世始メテ文學ニ對スル觀念ヲ一新シテ近世ノ小説界ヲ覆ヒシ勸懲主義ノ雲ハ晴レタリ。

曲亭馬琴

勸懲主義ニテ最モ成功シタル者ハ里見八犬傳ナリ。八犬傳ハ曲亭馬琴ノ作ニシテ文化十一年ニ稿ヲ起シ二十八年ニ畢リタル大作ナリ。其ノ書數ハ百五卷アリテ唐土ノ水滸傳ニ據リ之ヲ南總里見氏興亡ノ事蹟ニ縁飾セシモノナルガ其文章ハ程ヨク和漢ノ語ヲ混シテ七五四六駢儷ノ調ヲ用非タレバ流暢ニシテ殆ド律語ノ如シ。但シ之ガ爲ニ浮華ノ嫌アル點ナキニ非ズ。初年ノ作ナル椿説弓張月ハ此弊少キヲ以テ却テ優レリトイフ者アリ。弓張月ハ五篇三十卷源爲朝ノ事蹟ニ據リテ作りタルモノナリ。馬琴ハ瀧澤解トイヒ

里見八犬傳

江戸ノ人書肆ノ管店タリシ時モアリシガ刻苦精勵遂ニ一方ノ旗將タル大家トナレリ。文筆ニ從事スルコト六十年晩年ニハ明ヲ失ヒシガ尙其業ヲ廢セズ。一生ノ著作コノ二書ノ外朝夷巡島記近世説美少年錄三七全傳南柯夢等三百種ニ近ク夢想兵衛蝴蝶物語化競丑滿鐘ノ如キ諷刺滑稽ナル作モアリ。

三馬ト一

滑稽小説ニハ式亭三馬十返舎一九ノ二人アリ。馬琴ト時ヲ同シウス。三馬ノ傑作ヲ浮世床浮世風呂トイヒ一九ノヲ東海道中膝栗毛トイフ。膝栗毛ハ兩奇人ガ失策破綻ニ充サレタル旅行記ニシテ床風呂ハ中等以下ノ社會ヲ題目トシテ人間ノ習癖弱點ヲ描キタルモノナリ。

山東京傳

馬琴ノ一時師事シタル人ニ山東京傳アリ。初ハ洒落本ヲ書キタリシガ晩年ニハ專讀ミ本ノミヲ作り本朝醉菩提優曇

爲永春水

華物語・稻妻表紙等有名ナリ。讀ミ本トハ軍記實錄ト淨瑠璃トヲ融化シテ、更ニ一體ヲナシタル物語風ノ作ヲ云フナリ。洒落本、一ニ菟薺本トイフ。花柳社會ノ状態ヲ描キタル、極メテ猥褻ナルモノナリシカハ、寛政三年幕府ヨリ禁ゼラレテ、爲ニ一頓挫ヲ來シ、ガ其禁弛ブニ及ビ、爲永春水其形ヲ變ヘテ、人情本ト稱シ、梅曆辰巳ノ園等ヲ出シテ、一時世ニ行ハレシガ、天保十三年再ビ禁止セラレテ、春水ハ罪セラレヌ。又草雙紙トイフ一體アリ。讀ミ本ガ文章ヲ讀マシムルヲ主トスルニ反シ、一葉毎ニ繪ヲ挿ミ、文ヨリモ繪ヲ主トシタル者ナリ。柳亭種彦ノ倭紫田舎源氏ヲ白眉トス。源氏物語ヲ根據トシテ之ヲ室町時代ノ事件トシタルモノニテ、詞藻優麗ナルノミナラズ、名手ノ挿繪アリテ、大ニ世ノ喝采ヲ博シタリ。

柳亭種彦

自笑ト其積

井原西鶴

抑コノ草雙紙ニシテ、斯ク長篇トナリシハ、文化文政ヨリニテ、其以前ハ僅ニ五枚ヲ一卷トシタル兒童ノ玩具ニ過ギザリシガ、後其十卷ヲ合セテ、上下ノ二冊トナシ、合巻物ト稱シテ、世ニ出デシヨリ、漸次長篇トハナリタルナリ。此等ノ讀ミ本、草雙紙等ハ、皆江戸ニ起リタルモノナルガ、享保ノ頃、京師ノ書肆八文字屋自笑ト云フ者ト、江島屋其積トカヲ合セ、西鶴ノ浮世草紙ヲ粉本トシテ、專ラ世態人情ヲ寫シ、傾城禁短氣、傾城色三味線等ヲ著セリ。之ヲ八文字屋本トイフ。井原西鶴ハ大阪ノ人、俳諧ヲ宗因ニ學ビテ、其達人ナリシガ、筆ヲ浮世草紙ニ著ケテ、輕妙ノ文、奇警ノ想、自ラ文壇ニ一異彩ヲ加ヘタリ。ソノ一代男、一代女、世間胸算用等ノ著、即チ是ナリ。

椿説弓張月

曲亭馬琴

案下某生再説、陶松壽等ハ順風ニ眞帆掛ケテ、大洋數十里ヲ走ラシ、次日佳奇呂麻へ著船シテ、磯邊ニ打テ上リテ見ルニ、島ニハ人影モ有ラザリケリ。トカクシテ巨木ノ虚ニ、老イタル男女嫁レ居タルヲ見出シテ、其故ヲ問ヘバ、件ノ老夫婦恐ルノ、這ヒ出デ、今朝シモ大將ノ軍船コノ島ヲ指シテ漕ギ寄セ給フヲ、島人等早クモ見テ深ク怪ミ、コハ疑フベクモアラヌ蒙雲法王ノ軍兵ナルベシトテ、衆皆アワテフタメキツ、山深ク逃ゲ入リテ候ヒシガ、吾儕ハイタク老イタレバ、思フ儘ニ山ニ登ルコトモ得叶ハネバ、此處ニ隠ロヒ候ト云フ、松壽ハ之ヲ聞キテ打笑ヒ、汝等サハ恐ナセソ、吾ハ爲朝ノ訴ニヨリテ王子ノ仰ヲ承リ、寧王女ヲ南風原へ返シ入レ奉ラン爲ニ、來レル按司陶松壽ナリ、汝等早ク島長ニ此由ヲ告ゲヨカシトテ、イト丁寧ニ説キ諭セバ、老夫婦深ク歡ビテ、各杖ニ携リツ、山路ヲ指シテ走リ去リ、一時アマリヲ經テ、島長林太夫ヲ將テ歸リツ。當下島長等ハ沙ニ頭ヲ突キ埋メテ、數回松壽ヲ拜スレバ、松壽ハ長ヲ近ク招キテ、爲朝ヲ大里ノ按司ニ任セラレタルコト、且カノ人ノ申スニヨリテ、王女ハ此島ニ在ス由ヲ知シ召ス、乃松壽ヲ以テ仰へ取ラシ給フ

仰ヲ述ベ、大臣利勇ノ處分ニヨツテ來レリト説キ知ラスレバ、林太夫等歡ビ、カ、ルベシトハ思ヒガケズ、遙ニ其船ヲ見テ、島ノ老弱驚キ騒ギ、スハ蒙雲ガ討手ノ兵コソ出デ來ニケレ、若モ脱ル、事モヤトテ、衆皆山深ク躲ル、ニ、王女獨リ騒ギ給ハズ、ナデフサル事ヤハ有ル、思フニ彼軍船ハ、南風原マデ我ヲ迎ヒノ使ナルベシト宣ヒシガ、ナ、ホ心モトナケレバ、ワリナク王女ヲ背負ヒマキラセテ、岩窟ノ中へ潜シ奉リシニ、此老夫婦ガ云々ノ由ヲ告グルニ、活キタル心地シテ、始テ王女ノ叡智ヲ感ジ、先王女ヲバ長ガ家ニ歸シ入レ奉リス、見參アルベシト云ヒ果テ、皆先ニ立チテ誘引フニゾ、松壽ハ軍兵ヲ磯方ニ殘シ留メ、僅ニ十人ノ筑登之ヲ將テ、島長ガ家ニ赴キ、王女ニ拜謁シテ爲朝ノ事ヲ告ゲ、王子ノ仰ヲ述ベニケレバ、王女ハ松壽ヲ勞ヒテ、或ハ歡ビ或ハウチ泣キテ、形ナキ世ノタマズマヒヲ憤リ、……サテ次ノ日追風ヨシトテ、松壽ハ王女ヲ船ニ扶ケ乗セ參ラシ、其餘ノ軍船前後ニ守護シテ、磯ヲ遙ニ漕ギ出セバ、島人等名殘ヲ惜ミ慕ヒ奉ルコト爲朝ト別レシ時ニ異ナラス、王女世ノ中廣ク成リ給ヘバ、御曹司ト共ニ蒙雲ヲ討滅シ、白日青天ヲ見セ給ヘカシト呼ブ

聲ヲ浦風サヘニ吹キ送リテ、イト々哀ハイヤ増シタリ。……サル程ニ
 王女ハ恙ナク小祿ノ港口ニ著船シ、ヤガテ南風原ノ城ニ成リ給ヘバ、爲
 朝モ亦兵ヲ纏メテ大里ヘ歸リ給ヒニケリ。サレバ利勇ハ恭シク王女ヲ
 城中ニ迎ヘ入ル、ニ、王女ハ利勇ヲ見テアワタマシク答禮シ、ワラハハ
 爲朝ガ妻ニ白縫ト呼バル、者ニ侍リ、大臣ノ尊信禮ニ過ギタリトイラ
 ヘ給フ。物ノイヒ様琉球言葉ニアラザレバ、利勇ハ呆レテ先赤蕉舎ニ勝
 引シ、女房五七人ヲ冊シテ、竊ニソノ爲體ヲ窺フニ、萬僞ニ非ズ、ゲニ王女
 ハ先ニ松壽ニ撃タレタリケルニ、之ハ王女ノ亡魂ガ他婦ニ憑キタルナ
 ラン。サレバ面影コソ王女ニ似タレ、其人ニハアラザリケリ。然リトモ我
 今コノ女ヲ王女ニシテ爲朝ニ妻セナバ、世ノ人我ヲ義士ト稱ヘン、サナ
 リト意ノ中ニ計較ミテ、遂ニ松壽ヲ疑ハズ、懸テ黃道吉日ヲト占シ
 テ、松壽ヲ以テ王女ヲ大里ノ城ヘ送ラシ、婚姻ノ事ヲ執リ行ハス。……

東海道膝栗毛ノ一節

十返舎一九

ソレヨリ鹽井川トイフ所ニ至リケルニ、昨日ノ雨強クシテ橋落チケル

ニヤ、行キ交フ人ミヅカラ股引ヲ取り、裾マクリ上ゲテ、コ、ヲ渡ルニ、彌
 治郎北八モイザヤ引キ連レテ、渡リナントスル折柄、京上リノ座頭二人
 連、此川ノ步渡リナルコトヲ聞ケルニヤ、一人ノ座頭 犬市モシ、川ハ膝ギ
 リモゴザリマヌルカナ。北八、左様々々、併シ水ガ早イカラオメエ方アア
 プナイ、用心シテ渡リナセエ。犬市、ハア成程水ノ音ガ餘程早イト云ヒツ
 ツ石ヲ拾ヒ川ノ中ヘ投ゲ込ンデ考ヘ。犬市、イヤ此處ラガドウカ淺イ様
 ダ、コリヤ猿市、二人ナガラ脚半ヲ取ルモ面倒ダ、御主若役ニオレヲオプ
 サツテ渡レ。猿市、ハ、ズルイ事ヲヌカス、拳デ參ラウ、何デモ負ケタ
 者ガオブツテ渡ルノダガヨシカ。犬市、コリヤ面白イ、サアコンサンナ、梅
 デ。猿市、リヤンゴウサイ、ト片手拳打チナガラ、兩方カラ左ノ手ヲ出
 シ、互ニ拳ヲ打ツ手ヲ握リ合ヒ。犬市、サア、勝ツタゾ。猿市、エ、忌々シ
 イ、ソシナラ此風呂敷包ヲ貴様一所ニシヨハツセエ、ソレヨシノ、サアコ
 イ、サアコイト支度シテ背中ヲ向ケル、彌次郎、是ハ有リガタイト猿市ニオ
 プサレバ、猿市連ノ犬市ト心得テ、サツト川ヘ這入り、難ナク向フヘ
 渡ルト、此方ノ岸ニ殘リタル犬市、ヤイ猿市ドウスル、早ク川ヲ渡サヌカ。

(猿市向フ岸ニテ聞キ附ケ、腹ヲ立テ)コリヤ串談ナヤツダ、タツタ今オブ
 サツテ渡シタニ、又ソツチへ行ツテオレヲナブルナ。犬市、コリヤ、己レ兄
 弟子ニ向ツテ言語道斷ナ、早ク來テ渡サヌカ。(ト白イ眼ヲムキ出シ、腹立
 テル故、猿市シカタナク、又コチラへ渡リテ歸リ) 猿市、サア、オブサリナサ
 ロ。(ト背中ヲ出ス) 北八、シメタト手ヲ拍ツテオブサレバ、猿市又サツ
 ト川へ這入ル、犬市ハ大イニセキ込ミ、コレ猿市ドコニ居ル、猿市川中ニ
 テ、イヤ、コイツハ誰ダ。(ト北八ヲ川ノ中へドンブリ落ス) 北八、アイ、助ケテ
 クレ。(ト手足ヲモガキ流ル、故、彌治郎飛ビ込ミ引キ上グレバ、腹カ
 ラ骨マデ腐ルホド濡レ) 北八、エ、座頭メガ飛ンダ目ニ合ハシヤガツタ。
 彌治ハ、くく、先著物ヲ脱ギヤレ、絞ツテヤラウ。北八、全體彌治サン
 ガ悪イ、ナンノオブサラズトモイ、事ニ、オメエガ手本ヲ出シタカラッ
 イオレモ。彌治川へハマツタカ、氣ノ毒ナハ、くく、ソレデ一首、
 ハマリケリ、眼ノナキ人ト侮リシ報ハ早キ川ノ流ニ

稻妻表紙ノ一節

山東京傳

冥途ノ旅ノ置土産、永キ形見ト思サレテ、御聞キ下サレカシ。母人様其琵琶
 琶コ、(ト云フニゾ、磯菜泣ク) 琵琶取り出シテ與フレバ、僅ニ年ハ
 十一才ノ盲兒ガ、縹木綿ノ肩アゲニ、血汐滴ル疵口ノ痛サヲ、恠へテ、琵琶
 カキ鳴シ、イト苦シゲニ聲立テ、歌フ唱歌モ聲曇リ、彈ク手モ顫ヘテ、慥
 ナラネド、流石日頃ノ手練トイヒ、此世ノ名殘ト思フカラ、苦シキ息ヲ、勵
 マセツ、三重ノ甲ヲアゲ、初重ノ乙ニ收メテ、歌ヒスマシタリケレバ、大
 絃ハ嘈々トシテ急雨ノ如ク、小絃ハ切々トシテ私語ノ如ク、昭君馬上ヲ
 調べ、樂天客舟ニ聞キツルニモ、遙ニマサリテ哀ナリ。南無右衛門耳ヲ歎
 テ、聞キ居タルガ、……文彌ハナホモ聲フリ立テ、歌フ聲サへ次第ニ
 弱リ、殆ド絶エン琵琶ノ緒ニカ、ル血汐ノ疵口ヨリサト流ルレバ、アナ
 苦シヤ、最早歌フコト叶ヒ難シ、是迄ゾトテ琵琶ヲ置キ、此世カラサへ一
 筋ノ杖ヲ便リノ暗穴道、死出ノ旅路ハ、殊更ニ、黒闇地獄ニ迷ヒ行ク、無目
 ノ餓兒ト生レ出デ、阿責ヲ受ケムハ、必定ナリ、ソレヲ不便ト思スナラ、未
 期ノ水ヲ逆様ニ、逆縁ナガラ御手ヅカラ、香花ヲ手向ケ賜ハレカシ、我身
 ノ爲ノ功德ニハ、他人ノ千僧供養ヨリ、遙ニ勝リ候フベシ、サラヌダニ親

子ハ一世ノ契ト聞クニ、盲目ノ悲シサハ、父上母上千萬年ノ御齡過ギテ冥途ヘオハス事アリトモ、御顔ヲ見ル事叶ハジト思ヘバ、之ガ三世ノ別、又逢フコトハ有ラジト思ヘバ、イトミ悲シク名殘惜シ、父上ハ何處ニオハスゾ。ト云ヒツ、這ヒ寄りテ、南無右衛門ニ取り絶リ、身ウチヲ探リツツ撫デマハシ、御苦勞ヲ成サル、故カ、イカウヤツレガ見エ侍ル。……

一、近古文學

概論

慶長八年、徳川氏ノ世トナリテヨリ、泝リテ文治二年、源頼朝總追捕使トナリテ、兵馬ノ權ヲ鎌倉ニ執リシマデ、四百十六年間ハ、吾歴史中最モ兵亂多ク、後ニシテハ應仁ノ大亂アリ、中ニシテハ南北朝ノ分争アリ、前ニシテハ蒙古ノ入寇アリ、シナド、何レモ古今ニ類ナキ事ナリキ。然レバ恐クモ王室ハ疲弊シ給ヒ、公卿侯伯ハ困頓ヲ極メ、百姓萬民ハ塗炭ノ苦ニ

泣キヌ。カ、ル時代ニ、争デ文學ノ盛ナルコトヤアル。

一言ニシテ之ヲ蔽ヘバ、此時代ノ文學ハ、全ク僧侶ノ手ニ在リ、タリトイフベシ。故ニ五山ノ僧徒ノミ獨リ呻晤ノ聲、此時代ノ末ニマデ絶エズシテ、謠曲ニテモ、軍記文ニテモ、其作者ノ多クハ僧徒ナリトイヒ傳フ。又兼好ニテモ、長明ニテモ、皆遁世者ニテ、同シ臭味ヲ有シタリト云フ。蓋シ其的證トスベシ。

然レドモ和歌バカリハ、其勢力京師ニ留マリテ、有名ナル人モ、公卿ノ間ニ甚多カリキ。但コレスラモ、此時代ノ末期ニハ、連歌ノ盛ナルト同時ニ、全ク地下ノ手ニ落チ、以テ下層ノ文學趣味ヲ起サシムル原因トナレリ。今、コノ時代ノ文學ヲ類別スルコト左ノ如シ。

和歌

律語

連歌

軍記物語・謡曲

擬古文

散文

和漢混和文

御伽草子

和歌

傳授

勅撰集

傳授トイフ一種ノ鍵關ハ、數多ノ歌人ヲシテ、轉迷宮ヲ辿ラシムル感アリタリキ。ソモ傳授トハ何ゾ、學問ヲ公開セズシテ、一子相傳・祕事口傳ナドイフモノ、卽是ナリ。コレ和歌ノ實權ガアル一人ノ家ニ歸シタルヨリ、其子孫ガ自家ヲ神聖ナラシメム爲ニ、言ヲ父祖ニ託シテ作り出セルモノナリ。ソモ、和歌ニ勅撰トイフコトアリテ、勅ヲウケテ撰集ス

ル人ハ、自ラ一代ノ宗トナリヌ。此勅撰ハ第二十一回マデ續キタルガ、今其此時代ニ屬セルモノヲ擧グレバ、

新續古今^{廿一} 新後拾遺^{廿二} 新拾遺^{廿九} 新千載^{十八}

風 雅^{十七} 續後拾遺^{十六} 續千載^{十五} 玉 葉^{十四}

新後撰^{十三} 續拾遺^{十二} 續古今^{十一} 續後撰^十

新勅撰^九 新古今^八

ノ十四集ニシテ、其撰者ハ、

爲氏^{廿三} 爲世^{廿五} 爲通^{廿七} 爲定^{廿九} 爲遠^{三十}

俊成^{廿一} 定家^{廿二} 爲家^{廿三} 爲教^{廿四} 爲藤^{廿五} 爲明^{廿六} 爲冬^{廿七} 爲重^{廿八}

爲相^{十四} 爲兼^{十四}

ナリ。見ルベシ、和歌ハ定家ノ一流ニ歸シタルヲ、偶ソノ頃歌ヲ詠マムトスルニモ、師資ヲ要スル風アリテ、祕傳トイヒ、口授トイフモノ大ニ起リ、且語ヲ禁シ、句ヲ制シ、ソノ極定家假

字遣トイフ一種ノ假字遣ヲサヘ説クニ至レリ。
 コノ十四集ノ中ニテ、風雅集ハ花園帝當時ノ歌風ヲ矯メム
 聖慮ニテ、親ヲ撰ヒ給ヘル者ニテ、其頃ノ作者ニハ澤田ノ頓
 阿・裾野ノ淨辨等アリ。又幸ヒニモ新古今集ハ、相傳・祕傳ノ流
 毒ヲ受ケザルノミナラズ、上ニハ歌聖トイハレ給フ後鳥羽・
 順德ノ兩上皇オハシ、下ニハ定家・家隆・西行等ノ作家アリシ
 時ニ成リタレバ、華實兼ネ備ハリテ、前後ニ傑出セリ。式子内
 親王及ビ僧寂蓮・長明モ亦此頃ノ作者ナリ。新勅撰ハ新古今
 ヨリ後ル、コト三十年ナラザルモ、意氣銷沈シテウラ淋シ
 キハ、承久ノ亂後、京師ノ勢力頓ニ地ニ墜チタル影響ナラム。
 コ、ニ勅撰ニ准セラレタル一集アリ。南朝弘和、中宗良親王
 ノ撰バレタル新葉集ナリ。之ト實朝將軍ノ金槐集トガ、生氣
 アリテ異彩ヲ放テルハ、境遇ノ然ラシメタルニモアラム。此

實朝ハ定家ノ門人ナリ。
 定家ハ京極中納言ト稱セラレ、和歌ノ才ハ殆ド天品ナル上
 ニ、家學ノ根柢サヘアリタレバ、縱横馳騁シテ可ナラザルナ
 ク、優ニ一代ノ仰止トナリキ。拾遺愚草ハ其集ナリ。西行ハ俗
 名ヲ佐藤憲清トイヒ、少キヨリ出家シテ、天下ヲ周遊シ、意會
 スレバ輒吟咏シタリトイフ。其集ハ山家集ナリ。

頓 阿

山里ハ訪ハレシ庭モ跡絶エテ散リ敷ク花ニ春風ゾ吹ク

月宿ル澤田ノ面ニ伏ス鴨ノ氷ヨリ立ッ明方ノ空

宗良親王

君ノ爲世ノ爲何カ惜シカラム棄テ、カヒアル命ナリセバ

花山院師賢

死出ノ山越エムモ知ラデ都人ナホサリトモト我ヲ待ツラム

藤原定家

霜マヨフ空ニシヲレシ雁ガネノ歸ル翅ニ春雨ゾ降ル
見渡セバ花モ紅葉モナカリケリ浦ノ苦屋ノ秋ノ夕暮

順徳院

百敷ヤ古キ軒端ノシノブニモ猶餘リアル昔ナリケリ

後鳥羽院

見渡セバ山本霞ム水無瀬川夕ハ秋ト何思ヒケム

源實朝

武士ノ矢ナミツクラフ籠手ノ上ニ散タバシル那須ノ篠原

源家隆

明ケバ又越ユベキ山ノ峰ナレヤ空行ク月ノ末ノ白雲

櫻花夢カ現カ白雲ノ絶エテツレナキ峯ノ春風

西行法師

歎ケトテ月ヤハ物ヲ思ハスルカコチ顔ナル我涙カナ

津ノ國ノ難波ノ春ハ夢ナレヤ蘆ノ枯葉ニ風渡ルナリ

連歌

俳諧ト連歌ト

近古時代ニテ俳諧トイフハ、俳諧體ノ連歌トイフ略稱ニシテ、山崎宗鑑ガ犬菟玖波集ヲ出シテ、頗ル滑稽ノ趣味ヲ鼓吹セシ風體ニ負セタル名ナリ。之ニ對シテ從來ノヲ單ニ連歌トイフ。宗鑑ト同時ニ荒木田守武アリ。亦俳諧體ヲ唱フ。而シテ一句云ヒ捨ノ句モ、此頃ヨリ起レリトイフ。

宗祇

犬菟玖波集ニ先ダチテ、新菟玖集アリ、僧宗祇ノ撰スル所ナリ。宗祇ハ歌ニモ達セシガ、連歌ヲ善クシテ、遂ニ天下第一ト稱セラレ、天子ヨリ花ノ本ノ號ヲ賜ハリタリ。連歌ハ和歌ノ如ク窮屈ナル法式ナキガ故ニ、人ソノ門ニ入り易ク、天下靡然トシテ之ニ嚮ヘリ。コレ即文學ガ平民ノ手ニ落チタル嚆矢ナリト云フ。彼ノ宗長肖柏等ハ宗祇ノ高足ノ弟子ナリ。カク連歌ガ盛ニ至リシハ、二條良基ガ菟玖波集ヲ撰ビシヨ

二條良基

リ始メテ世ニ知ラル。此ハ翌年勅撰ニ准セラレテ、彼新千載ノ成リシヨリハ、二年前タリ。良基又連歌新式ヲモ定メヌ。

傘ヲ著テ雨ニモ出デヨ夜半ノ月

山崎宗鑑

手ヲツイテ歌申シ上グル蛙カナ

元日ヤ神代ノ事モ思ハル、

荒木田守武

御座敷ヲ見レバ何レモカミナ月

守武

ヒトリ時雨ノフリ烏帽子著テ

宗祇

雪ナガラ山本霞ムタカナ

宗祇

行ク水遠ク梅薫ル里

肖柏

河風ニ一村柳春見エテ

宗長

舟サス音モシルキ明方

祇柏

月ヤナホ霧渡ル夜ニ殘ルラム

柏祇

霜オク野原秋ハ暮レケリ

長柏

(水無瀬三吟百韻)

ワレ一人今日ノ軍ニ名取川

源頼朝

君モロトモニカチ渡リセン

梶原景時

平家物語ト謠曲

謠曲

狂言

近世ノ淨瑠璃ハ、謠曲ニ負フ所多シ。謠曲トハ猿樂ニ伴ヘル章曲ノ名ナリ、内外スベテ二百餘番、對話ノ詞ヲ除キテハ七五ノ調ヨリ成ル。抑猿樂トハ殆ド滑稽トイフ程ノ意味ナレバ、最初猿樂トイヒシモノハ、タゞ人ヲシテ歡笑セシムル技ニ止リシガ、結崎觀阿彌・世阿彌出ヅルニ及ビ、之ニ田樂・曲舞等ヲ折衷シ、又支那ノ雜劇ヲモ同化シテ、一種ノ優美高尚ナル舞トナシヌ。此ニ於テ、本來ノ猿樂ノ脈ヲ引ケル滑稽一邊ノモノハ、狂言トナリテ起レリ。狂言ハ對話ノミヨリ成リテ、

結構ハホ、近世ノ脚本ニ似タリ。
謠曲以前ニアリタル謠ヒ物ニハ、平家トテ信濃前司行長ノ
作ナリトイヒ傳フル平家物語ヲ琵琶ニ合ハセテ語ルモノ
有リキ。

景清

人丸從者次第消エヌ便モ風ナレバ露ノ身イカニ成リツラム。人丸是ハ鎌倉
龜ガ江ガ谷ニ人丸ト申ス女ニテ候サテモ我父悪七兵衛景清ハ平家ノ
味方タルニヨリ源氏ニ憎マレ日向ノ國宮崎トカヤニ流サレテ年月ヲ
送り給フナル未ダ習ハヌ道スガラ物ウキ事モ旅ノ習又父故ト心強ク
人丸從者思ヒネノ涙片敷ク草ノ枕露ヲ添ヘテイト繁キ袂カナ。歌相模
ノ國ヲ立チ出デ、誰ニ行方ヲ遠江ゲニ遠キ江ニ旅舟ノ三河ニ渡ス八
橋ノ雲井ノ都イツカ扱カリ寢ノ夢ニナレテ見ム、從者詞ヤウ、御急
ギ候程ニ是ハ早日向ノ國宮崎トカヤニ御著キニテ候コ、ニテ父御ノ
御行方ヲ御尋アラウズルニテ候。

景清松門獨リ閉ヂテ年月ヲ送り自ラ清光ヲ見ザレバ時ノ移ルヲモ辨
ヘズ暗々タル庵室ニ徒ニ眠リ衣寒暖ニ與ヘザレバ肌ハ髒骨ト衰ヘタ
リ。地トテモ世ヲソムクトナラバ墨ニコソ染ムベキ袖ノアサマシヤ、
ヤツレ果テタル有様ヲ我ダニ憂シト思フ身ヲ誰コソ有リテ憐ミノウ
キヲ弔フ由モナシ(中略)

從者詞イカニ此アタリニ里人ノ渡リ候カ、里人詞里人トハ何ノ御用ニテ
候ゾ、從者流サレ人ノ行方ヤ御存シ候、里人流サレ人ニ取リテモイカ様
ナル人ヲ御尋ネ候ゾ、從者平家ノ侍悪七兵衛景清ヲ尋ネ申シ候、里人只
今此方へ御出デ候山陰ニ藪屋ノ候ニ人ハ候ハザリケルカ、從者其藪屋
ニハ盲目ナル乞食コソ候ヒツレ、里人ナウ其盲目ナル乞食コソ御尋ネ
候景清候フヨアラ不思議ヤ景清ノ事ヲ申シテ候ヘバアレニマシマス
御事ノ御愁傷ノ氣色見エ給ヒテ候ハ何ト申シタル御事ニテ候ゾ、從者
御不審尤ニテ候何ヲカ包ミ申シ候ベキ是ハ景清ガ息女ニテ渡リ候ガ、
今一度父御ニ御對面アリタキ由仰セラレ候ヒテ是マデ遙々御下向ニ
テ候トテモノ事ニ然ルベキ様ニ仰セラレテ景清ニ引合セ申サレテ賜

リ候へ。(中略)

里人アラ痛ハシヤ、先カウ渡リ候へ。イカニ景清ニ申シ候、御娘御ノ御所望ノ候、景清何事ニテ候ゾ、里人八島ニテ景清ノ御高名ノ様ガ聞シ召サレタキ由仰セラレ候、ソト御物語アツテ聞カセ申サレ候へ、景清は何トヤラン似合ハヌ所望ニテ候へドモ、是迄遙々來リタル志、餘ニ不便ニ候程ニ、語ツテ聞カセ候ベシ、此物語過ギ候ハ、彼者ヲヤガテ故郷へ歸シテ賜リ候へ、里人心得申シ候、御物語過ギ候ハ、ヤガテ歸シ申サウズルニテ候。景清イデ其頃ハ壽永三年三月下旬ノ事ナリシニ、平家ハ船源氏ハ陸、兩陣ヲ海岸ニ張ツテ互ニ勝負ヲ決セント欲ス、能登守教經宣フ様、去年播磨ノ室山、備中ノ水島、鶴越ニ至ルマデ、一度モ味方ノ利無カリシ事、偏ニ義經ガ計イミジキニ由ツテナリ、イカニモシテ九郎ヲ討タシ謀コソ有ラマホシケレト宣へバ、景清心ニ思フ様、判官ナレバトテ鬼神ニテモアラバコソ、命ヲステバ易カリナント思ヒ、教經ニ最後ノ暇乞ヒ、陸ニ上レバ源氏ノ兵餘スマジト駈ケ向フ、地景清之ヲ見テ物々シヤト、夕日影ニ打物閃カイテ切ツテカ、レバ、コラヘズシテ刃向イタル

兵ハ、四方へバツトゾ逃ゲニケル。逃ガサジト 景清サモウシヤ方々ヨ、地サモウシヤ方々ヨ、源平互ニ見ル目モ耻カシ、一人ヲトメン事ハ案ノ打物小脇ニカイ込ンデ、某ハ平家ノ侍悪七兵衛景清ト名ノリカケ、手取ニセントテ追ウテ行ク、三保ノ谷ガ著タリケル、冑ノ鎧ヲ取リハツシ、二三度逃ゲ延ビタレドモ、思フ敵ナレバ免サジト飛ビカ、リ、冑ヲオツ取り、エイヤト引ク程ニ、鎧ハ切レテ此方ニ止マレバ、主ハ先へ逃ゲ延ビヌ。遙ニ隔テ、立歸リ、サルニテモ汝、恐シヤ腕ノ強キト云ヒケレバ、景清ハ三保ノ谷ガ頸ノ骨コソ強ケレト笑ヒテ左右へノキニケル、地昔忘レヌ物語、衰へ果テ、心サへ、亂レケルゾヤ。耻カシヤ、此世ハトテモイク程ノ命ノツラサ末近シ、早立歸リナキ跡ヲ弔ヒ給へ、盲目ノ暗キ所ノ燈火アシキ道橋ト頼ムベシ、サラバヨトマル、行クゾトノ唯一聲ヲキ、ノコス、是ゾ親子ノ形見ナル。

(謠曲集)

ドブカツチリ

勾當罷リ出デタルハ此アタリニ住居仕ル勾當ノ方デゴザル、左様ニ御

座レバ今日ハ菊一ヲ連レ嵯峨へ參ラウト存ズル菊一アルカ、菊一コレニ居リマスル、勾ソナタヲ呼ビ出スハ別ノ事デモナイ、嵯峨へ參ラウト事デヤガ參リヤラヌカ、菊勾當様ノ參ラサツシヤレマスルナラ、參リマセウ、勾オヂヤレ、菊往キマスル。

勾ノウ菊一、アノトント、云フハ川デハ無イカ、菊ア、是ハカイ川ト申シマスル、勾イカウ水ガ出タサウナゾヤ、菊待タシヤレマセイ、瀨踏ヲシテ見マセウ、石ハ無イカ、チャマテイ、イエ有ルハ、マ此處へ打ツテ見マセウ、ドブ、ア、イカウ深サウナ、上、手へ打ツテ見マセウヤ、エイドブリカツチリ、ハア勾當様上へ廻ラシヤレマセイ、上、ガ淺ウゴザリマスル、勾ヤイ菊一、負ウテ渡セ、菊コナ様モ渡ラシヤレマセイ扱。

道行人罷リ出デタルハ道通リデゴザル、イヤ座頭ガ座頭ヲ負ウテ渡スト見エタ、某ガ負ハレテ渡リマセウズ、勾ヤイ菊一、己ヲ連レルハカヤウナ川ナドモ負ハレテ渡ラウト思ウテ連レ、急イデ負へイノ、菊コ、へゴザリマセイ、ア、イカウ深ウゴザリマスルゾ、ヤウ、ノ事シテ渡

ツタヨ、道ヤレサテ、マン、ト負ハレテ渡リマシタ。勾ヤイ菊一、己バカリ渡ツテ、ナゼニ某ヲバ置イテ往タゾイヤイ、菊ワ、勾當様又今ノ程負ヒ越シタニ足ノマメナ、ナゼニ又ソチラへ往カシヤツタゾ、ハレサテ物數奇ナ、目ノ見エヌ者ヲバアチラへコチラへサスルガ面白イカ、チャマテイ、サ負ハレサツシヤレ、イイエサテ又負ハレサツシヤレ、面白ゴザラウノ、勾何ヲ云フゾイヤイ、菊何イフト事ガ有ルモノデゴザルカイノ、ハ、深イ所ヲ這入りマシタワイノ、勾コレ、オドレ何事シオツタゾ、菊轉ビマシタワイノ、勾ヤレサテ、グット濡ラシオツタ、菊始ノデ置カツシヤリヤヨイ事ニ度三度サツシヤル所デ、オ、濡レテ寒ブヤナ。(下略)

(狂言記)

擬古文

此時代ニモ擬古文アリ、是此時代ノ文學ガ中古ノニ比較シテ荒涼ニ過ギタリシカバ、作者ヲシテ自ラ中古文學ヲ景慕

徒然草

セシメタルニ由レルカ、抑マタ漢土ニ於ケル文學ノ傾向ガ波及シテ、自ラ依樣ノ風ヲ來シタルニ依レルカ。千代田ノ大宮ヲ六百年ノ昔ニ繩張りセシ太田道灌ニ、平安紀行アルハ、上杉憲實ガ足利學校ヲ開キ、大内義隆ガ書冊ヲ板行シタルト、共ニ一ノ奇觀タラム。今川了俊亦文事アリキ。徒然草ハ此時代第一ノ作ナルベシ。兼好ハ卜部氏、後宇多上皇ニ仕ヘシガ、上皇崩ゼラル、ニ及ビ、世ヲ棄テ、遂ニ伊賀ニテ終レリ。儒佛ノ教ニ遠ク、又老莊ノ旨ニモ達シタル人ナレバ、其議論深遠幽玄ニシテ、行文モ源氏物語・枕草子ヲ學ビタル跡明カナリ、蓋其題目ニ至リテハ、漢語佛語ヲ交ヘテ、所謂儒佛混和文トモイフベキモノナリ。之ト前後シテ増鏡・水鏡出デタリ。増鏡ハ後醍醐天皇ヨリ浜リテ、後鳥羽天皇マデ。水鏡ハ仁明天皇ヨリ浜リテ、神武天皇

増鏡水鏡

十六夜日記

マデノ事實ヲ紀傳體ニ述ベタル歴史ナリ。但其水鏡ハ中山忠親ノ著ナリト云フ。十六夜日記ハ、和歌ノ名家ナル爲家ノ室タリシ阿佛尼ガ、訴訟ノ爲ニ鎌倉ニ赴キシ時ノ日記ナリ。此他辨内侍日記・中務内侍日記等アルモ、亦婦人ノ作ナリ。

和漢混和文

和漢混和文モ近古ニ存セリ。近古ニ此文體ノ生ジタルハ、國語ノ性質ニ原因セザルニ非ズ。ソモ、吾國語ハ母韻多ク、且一定セル助辭ヲ用井ル故ニ、文章ヲシテ平板ナラシメ、又流麗ニ過サシムル患アリ。然ルニ漢語ノ我國ニ入りテヨリ、殆ド第二ノ國語トナリ、其聲調頗ル沈鬱冷峭ナリシカバ、活潑莊重ノ文ニハ、漢文ノ趣ヲ帶ビ、優美委曲ノ文ニハ、國文ノ

國語ト漢語ト

桃花文庫

致多ク二者相混ジテ、當時ニ於ケル和漢混和文トナリテ、出
デタルナラム。
此時代ノ末葉ニハ、文學ノ頽廢ソノ極ニ達シ、桃花文庫ノ藏
書三萬五千卷ハ、兵亂ノ爲ニ取り亂サレ、數町ノ間ニ狼籍タ
リシニ、誰一人之ヲ收ムル者ナカリキト云フ程ナリキ。桃花
文庫ハ時ノ關白タリシ一條兼良公ノ邸ニ在リキ、公ハ當時
才學絶倫ト云ハレタル人ニテ、其著書ニハ樵談治要、東齋隨
筆、花鳥餘情、公事根源等アリ。

太平記

南北朝ノ末ニ、太平記出デヌ、作者ハ詳カナラザレドモ、近頃
小島法師ノ撰ナリトイヘル説アリ。主トシテ後醍醐天皇御
宇ノ間ノ事ヲ記セリ。其文章壯大流麗兼ネ得タレバ、後ニハ
之ヲ朗讀シテ、太平記讀ト稱スルモノサヘモ起リタリ。

神皇正統記

南朝ノ忠臣北畠親房ノ著シ、神皇正統記ハ、謹嚴正大ナル

十訓抄

筆ヲ以テ、南朝ノ正統タルベキコトヲ辯ゼシ史論ニシテ、讀
史餘論ト竝ビ稱セラレ。職原抄亦親房ノ手ニ成レリ。
北條氏ノ中頃ニ、十訓抄トテ十箇條ノ教訓ヲ立テ、各條ニ數
多ノ例話ヲ附セル者始メテ出デヌ。是實ニ吾國ニテ成レル
修身書ノ始ナリ。又單ニ話ヲノミ集メタルモノニ、古今著聞
集、宇治拾遺物語等アリ。

源平盛衰記

源平盛衰記ハ、源平兩氏ノ盛衰ヲ記シタルモノニテ、太平記
ノ如ク華縵ニ過ギズ、眞ニコノ文體ノ上乘タリ。此書ト平家
物語トハ、詳密ノ度コソ異ナレ、同シ事實ノ重複セル所多ケ
レバ、平家先出デタルヲ増補シテ、此書トナセルモノナリト
イフ説アリ。

方丈記

源親行ノ東關紀行、ソノ父光行ノ海道記、俱ニヨク和漢文ヲ
調和セザルニ非ザレド、方丈記ノ渾成セルニ比スレバ、未シ

保元平治
物語

五山ノ僧
徒

東鑑

ト謂ベシ。但其方丈記ハ鴨長明ノ著ニシテ、親ラ遭遇セル天
 變地異ニヨリテ、厭世ノ感ヲ述ベタル隨筆ナリ。
 又平治ノ亂ヲ記シ、平治物語、保元ノ亂ヲ記シ、保元物語
 アリ。俱ニ葉室時長ノ作ナリトイフ。
 コ、ニ又漢學ニツキテ一言セム。此時代ハ漢學全ク地ニ墜
 チテ、タ、五山ノ僧徒ノミ、獨占ノ姿ナリシガ、其中ノ義空・絶
 海ナドハ、詩文ノ妙、漢土ノ作家ニモ愧ヂズトイハル。又僧玄
 慧ハ後醍醐帝ニ濂洛ノ新註ヲ進講シタル人ニテ、カノ庭訓
 往來ハ其著ナルガ、今日ナホ用非ラル、候文(日用文)ハ蓋是
 等ニ淵源セラレタルモノナラム。
 又鎌倉幕府ノ歴史ニ東鑑アリ。其文體ホ、庭訓往來ニ同ジ。
 カノ徳川時代マデ、官府ノ文書ガ、全ク此體ナリシモ、亦コ、
 ニ胚胎セルナラム。

深耕說

僧 義 堂

空華叟郊居無事、出遊泛觀田野桑柘之間、有大麥同畝而異熟者、質諸老農、
 曰、惰農爲也、問其所以、曰、凡地耕而淺者、所種之物必早熟而不茂、深而耕者、
 所種之物必晚成而肥碩、是以善學稼者、患乎耕之淺、不患成之晚也、而彼惰
 者用力弗專、所以耕有深淺而熟有早晚也、嗟呼、今吾徒也、耕道不深而患名
 之晚者、豈無愧於老農之言也耶、余竊有感於中、遂書以告同學、端介
 然深耕者之徒也。

夢梅

夢入羅浮小洞天、幽人引步月嬋娟、曉來一覺知何處、雪後梅花淺水邊。

青字唱和

一別空山月照庭、相思三見菊花馨、天荒地老那堪嘆、雪苦霜辛亦飽經、
 東海暮雲空縹渺、北山秋樹正凋零、殷勤寄謝王孫草、換却東風幾度青。

後醍醐廟看梅

僧 絕 海

乘輿南狩不時回、遺廟西山雲一隈、昔日何人調鼎手、老禪掃雪獨看梅。

東營秋月

秋山關山月、高懸細柳營、中軍嚴下令、萬馬肅無聲、寒影旌旗濕、斜光睥睨明、何人橫槊賦、愁殺老書生。

春始御悅、向貴方先祝申候畢、富貴萬福、猶以幸甚幸甚、抑歲初朝拜者、以朔日元三之次、可急申之處、被賦催人々子日遊之間、乍思延引似谷、驚忘撥花苑、小蝶遊日影、頗背本意候畢、將又揚弓雀小弓、勝負笠懸小串之會、草鹿圓物之遊、三々九手夾八的等、曲節近日打續經營之尋常、射手馳挽、達者少々有御誘引、思食立給者本望也、心事雖多、爲期參會之次、委不能廢毫、恐々謹言。

(庭訓往來)

一日戊午武衛招請池前亞相給(中略)武衛先召彌平左衛門尉宗清平家一族也、是亞相下著、最初被尋申之處、依病遲留之由、被答申之間、定今者令下向歟之由、令思案給之故歟、而未參著之旨、亞相被申之、太遠亭主御本意云云、此宗清者池禪尼侍也、平治有事之刻、奉懸志於武衛、仍爲報謝其事、相向可下向給之由、被仰送之間、亞相城外之日、示此趣於宗清、處宗清云、令向戰場給者、進可候先陣、而倩案關東之招引、爲被酬當、初奉公歟、平家零落之今

參向之條、尤稱耻存之由、直參屋島前內府云云。

(東鑑)

御伽草子

近世小説ノ母タリシモノハ、御伽草子ナリ。コハ此時代ノ末ニ發達シタルモノニテ、物臭太郎御曹司島渡リ・梵天國ナド簡單ナル話多ク、因果應報ノ理ヲ含マセタル教訓的ノモノ、又ハ古英雄ノ功名談等ヲ主トス。文章ハ雅文ニ擬シタリトオボシク、五七ナドニ調ヲ整ヘテ書ケル痕モアリ。

柿本ノ系圖

昔奈良ノ御門ノ御時柿本ノ人九ト云フイマソガリケル歌ノ道妙ニシテ院内ヘモ折節毎ニ參リ、朝夕御遊ノ交ラヒヲノミシ給フ程ニ、御所柿トメサセ給ヒケルサルベキ營ミモセデ、糊ヲスリテ市ニ賣リケレバ、世ノ人御所柿ノコネリトナン申シケル。子ドモ數多持チタリ、太郎サネ

ナリハ明石ノ浦ニテ設ケタル子ナレバ、彼浦ニ住ミケリ、早ウマダキニ
 イト若キ頃ヨリ、鬢髭白クテ京ニ歸リ、父ト同ジク君様御前ヘモ立チ出
 デ、ハカバカシキ交ハリヲ許サレタリ、サレバ海人ノ子ナレバトテ、ツリ
 柿トゾ召サレケル。木サハシノ次郎ハ心様父ヨリハ劣リケレドモ、ハラ
 カラノ内ニハイチ早キ風流スルモノナリ。三郎ナリケルハ容フツ、カ
 ニシテ頑ナ、レバ、比叡ノ山ニ上セ學問サセケルガ、ヒンキノ峰ニ行キ、
 自ラ八王子ト號ス。其弟アリ澁川ノ某トカヤ武士ノガリ入婿シテケリ。
 心スネ氣澁リテ世ノ人口アカスベキモアラズ、ヤウノ年經テ眞モテ
 アツカヒテ様々戒メケル事ガ中ニウタテシキハ、コノ婿シブカキヲ粉
 ニ碎キ油ヲ漉シテ、調度ツ、ムツギ紙千ハヤフル紙子ヲ染メムトテ、明
 暮ウチタ、キ、辛キ目受クルヲ、二郎アハレガリ、カノ舅ニ對面シテ、我方
 ニテヨキ諫申サム、シカトツヅヤキ、ヤガテ澁柿ニ青道心起サセ生
 干入道ト號シテキテ歸リ、我窓ノ上軒ノ下ナドニ繩ヲモテ荒々トシメ
 ユハセ、フタリト下ゲタリ。月日經テ後今ハ心モ直リ様モ見惡シカラズ
 トテ、二郎許シテケリ、生干モ道心深ク思ヒ取り、濃キ墨染ニヤツレ果テ、

イト味ヨクアリト見エタリ、ヒタスラ生レカハリタル心地シテ、見ル人
 之ヲアマツシトテモテ噓シケリ。
 (新編御伽草子)

三、中古文學又平安文學

概論

壽永四年(文治元年)平氏亡ビタルヨリ、泝リテ、延曆十三年都
 ヲ平安京ニ奠メラレシマデ、三百九十年間ハ、近世ト相對シ
 テ、文學ノ隆盛ナリシ時ナリ。

此時代文學ノ大勢ガ、藤原氏ノ權力ノ消長ト略一致セルハ
 注意スベキコトナリ。藤原氏ニシテ最モ榮華ヲ極メシハ、道
 長ナラズヤ、此時代ノ二大文豪タル紫式部・清少納言實ニコ
 ノ時ニ出デ、才媛閨秀星ノ如クニシテ、文學ハ全ク婦人ノ手
 ニ在リキ。後三條天皇以後ハ藤原氏ノ隆盛昔日ノ如クナラ

ザリシカバ、文學モ衰色ヲ呈シ且漸ク男子ノ手ニ移ラムトセリ。又藤原氏ノ勢力ハ文德・清和ノ朝ニ養ハレタルヲ以テ、國文モソノ頃ヨリ勢ヲ得テ、歌ハ延喜ノ勅撰ニ千古ノ範ヲノコシ、文モ亦後世ノ標準文學トナリヌ。

カク國文ノ勃興セシニハ、内外二様ノ原因アリ。外ヨリセルモノニハ、遣唐使廢セラレテ、支那文物ノ輸入ヤミシ事ナリ。此以前ニハ支那崇拜ノ風、上下ヲ靡カシ、殊ニ嵯峨天皇ノ如キハ、漢詩ノ御製モ多ク、讀書ニモ漢音ヲ操リ給ヘリトイヘリ。サレバ漢詩ノ集モコ、ニ出デ、漢文ノ撰史モコ、ニ成リヌ。内ヨリセルモノニハ、平假字定マリテ、言語ノ記載容易トナリシコトナリ。カクノ如クナルヲ以テ、漢詩・漢文ノ盛ナルコトモ亦近古ニ比スベシ。

今、此時代ノ文學ヲ類別スルコト左ノ如シ。

律語 〔和歌〕今様・朗詠・催馬樂

散文 物語・日記・草子

和歌

勅撰ハ新古今ニ先ダツヲ千載トイヒ、詞花・金葉・後拾遺・拾遺・後撰アリテ古今ヲ首トス。

勅撰ノ集ニ選ミ入レラル、コトハ、歌人ガ尤モ面目トスルコトニテ、當時流行セシ歌合モ亦痛ク其名譽心ヲ刺戟シタリ。コ、ニ於テ當時ノ殿上人ハ詠歌ヲ常務トシ、競争ヲ生命トシタリキ。サレド後撰以後ノ諸集ハ、畢竟スルニ詞句ノ末ニ斧鑿剪裁ノ巧ヲ誇ルニ過ギザルナリ。是アマリニ古今集ヲ神聖視シ過ギテ、其範圍以外ニ新思想ヲ見出サムコトヲ勉メザリシ爲ナリ。歌合ニハ堀川院兩度百首・天徳歌合等ヲ

歌合

古今集

有名トス。

古今集ハ醍醐天皇ノ延喜五年紀貫之等勅ヲ奉シテ撰ビタルモノニテ用語ト思想トヨク調和シテ穩秀流麗ナリ。之ニ後撰拾遺ヲ加ヘテ三代集トイヒ新古今マデヲ加ヘテ八代集トイフ。歌人ノ主ナルモノハ千載ノ撰者タル俊成俊成ノ師タル基俊金葉ノ撰者タル俊賴拾遺ノ撰者タル公任後撰ノ撰者タル源順古今ノ撰者タル貫之及ビ遍昭康秀業平宮内卿伊勢小町等ナリ。

藤原俊成

俊成ハ道長四世ノ孫ナリ世ニ五條三位ト云フ。人トナリ温厚ニシテ其師基俊ハ俊賴ト相善カラザリシカバ其徒互ニ門戸ノ見ヲ持セシニ俊成ハ基俊ノ學力ヲ慕フト同時ニ俊賴ノ風體ヲ取りタリ。蓋シ基俊ニハ悦目抄俊成ニハ古來風體抄ナドノ歌論アリテ始メテ歌ハ師授ヲ要スルコトナ

リヌ。

源順

源順ハ梨壺五人ノ一ナリ。漢學ニモ達シ博識ノ名一時ニ高ク其著倭名類聚抄ハ我國辭書ノ始ナリ。

紀貫之

貫之ハ漢文ノ大家ナル長谷雄ノ孫ナリ古今集撰者ノ筆頭ニテ歌ニ妙ニ又國文ヲモ善クシテ古今集序及土佐日記ナド世ニ名アリ。特ニ此序文ハ吾國ノ歌ノ起源歴史ナドヲ述ベタル大文字ナリ。

在原業平

業平ハ桓武天皇ノ孫ニシテ居常藤原氏ノ專横ニ平カナラズ竟ニ風月ノ間ニ自放セリ。伊勢物語ハ其著ナリトイフ説アリ。

藤原俊成

昔思フ草ノ庵ノ夜ノ雨ニ涙ナ添ヘゾ山杜鵑

夕ザレバ野邊ノ秋風身ニシミテ鶉鳴クナリ深草ノ里

霜牙エテ枯レ行ク小野ノ岡邊ナル楢ノ廣葉ニ時雨フルナリ
藤原基俊

源俊頼

明日モ來ム野路ノ玉川萩越エテ色ナル浪ニ月宿リケリ

藤原公任

春來テゾ人モ訪ヒケル山里ハ花コソ宿ノ主ナリケレ

源順

我宿ノ垣根ヤ春ヲ隔ツラム夏來ニケリト見ユル卯ノ花

水ノ面ニ照ル月ナミヲ數フレバ今宵ゾ秋ノ最中ナリケル

紀貫之

人ハイサ心モ知ラズ故郷ハ花ゾ昔ノ香ニ匂ヒケル

遍昭

天ツ風雲ノ通路吹キ閉ヂヨ乙女ノ姿暫シ留メム

ハチス葉ノ濁ニ染マヌ心モテ何かハ露ヲ玉ト欺ク

文屋康秀

吹クカラニ秋ノ草木ノ萎ルレバムベ山風ヲ嵐ト云フラム

在原業平

世ノ中ニ絶エテ櫻ノ無カリセバ春ノ心ハ長閑ケカラマジ

思フコト言ハデゾタミニ止ミスベキ我ト等シキ人シ無ケレバ

宮内卿

淡ク濃キ野邊ノ緑ノ若草ニ跡マデ見ユル雪ノ村消

伊勢

春霞立ツヲ見捨テ、行ク雁ハ花ナキ里ニ住ミヤナラヘル

小野小町

花ノ色ハウツリニケリナ徒ニ我身世ニフルナガメセシ間ニ

天徳内裏歌合

判者小野宮左大臣實頼

三番 鶯

左 勝

朝 忠

我宿ノ梅ガ枝ニ鳴ク鶯ハ風ノ便ニ香ヲヤトメ來ン

右

兼盛

佐保姫ノ絲染メカクル青柳ヲ吹キナ亂リソ春ノ山風

鶯ヲ出スベキニ柳ヲ讀ミテ

白妙ノ雪降り止マヌ梅ガ枝ニ今ゾ鶯春ト鳴クナル

違ヘテ讀ミタレド、本歌ヲ召シ出シテ講ゼラル

右、講師博雅、朝臣誤讀柳歌、左方論云、須讀申鶯歌而誤讀申柳歌、

於今者不可讀申、歟者以左方論申旨、奏聞、仰云、可據定申者、小

臣、奏云、左方之所申、非無謂、如此之事、只隨時之議、但依人之誤、

何留其歌、仍令讀、申其時博雅、朝臣願變色、速不讀之、縱雖讀、揚其

音、振被爲左人、咲、又歌ノ詞ニ鶯春トナクコト、虛言ナリ、仍遂

爲負ト

四番 柳

左

望城

アラタマノ年ヲヘツ、モ青柳ノ糸ハ何レノ春カ絶ユベキ

右

兼盛

佐保姫ノイト染メカクル青柳ヲ吹キナ亂リソ春ノ山風

欲讀右歌之間、左方人申云、伴柳歌違、濫次第、讀事先畢、而重欲讀

之、似忘首尾者、小臣答云、鶯歌之時、隨左申、已有裁許、重不可申、

左歌アラタマノ年ヲ經ム青柳ヨシナシ、右歌サセル事ハナケ

レド難ハ見エズ、仍以右爲勝ト

古今和歌集序

紀貫之

ヤマト歌ハ人ノ心ヲ種トシテ萬ヅノ言ノ葉トゾ成レリケル、世ノ中ニ
アル人、事ワザ繁キ者ナレバ、心ニ思フコトヲ見ル物開ク物ニツケテ云
ヒ出セルナリ。花ニ啼ク鶯、水ニ接ム蛙ノ聲ヲ聞ケバ、生キトシ生ケル者
孰レカ歌ヲヨマザリケル。力ヲモ入レズシテ天地ヲ動カシ、目ニ見エヌ
鬼神ヲモ哀レト思ハセ、男女ノ中ヲモ和ゲ、武キモノ、フノ心ヲモ慰ム
ルハ歌ナリケリ。此歌天地ノ開ケ始マリケル時ヨリ出デ來ニケリ、云々、
千早振神代ニハ歌ノ文字モ定マラズ、スナホニシテコトノ心分キ難カ
リケラシ、人ノ世トナリテ須佐ノ雄ノ尊ヨリゾ三十文字餘リ、一文字ハ

詠ミケル、カクテゾ花ヲ愛デ、鳥ヲ羨ミ、霞ヲ憐ビ、露ヲ悲シブ心言葉多ク
 様々ニ成リニケル。遠キ所モ出デ立ツ足元ヨリ始マリテ年月ヲ渡リ、高
 キ山モ麓ノ塵ヒチヨリ成リテ、天雲タナビク迄生ヒノボレル如クニ、此
 歌モ斯クノ如クナルベシ。云々、古ヨリ傳ハル中ニモ、奈良ノ御時ヨリゾ
 廣マリニケル。彼オホム世ヤ歌ノ心ヲ知ロシ召シタリケム、彼御時ニ柿
 本ノ人麿ナム歌ノ聖ナリケル。是ハ君モ人モ身ヲ合セタリトイフナル
 ベシ。秋ノ夕龍田川ニ流ル、紅葉ヲバ、御門ノ御目ニハ錦ト見給ヒ、春ノ
 朝吉野山ノ櫻ハ、人丸ガ心ニハ雲カトノミナム覺エケル。又山部ノ赤人
 トイフ人アリケリ。歌ニ奇シク妙ナリケリ。人丸ハ赤人ガ上ニ立タム事
 難ク、赤人ハ人丸ガ下ニ立タム事難クナムアリケル。此人々ヲオキテ、又
 スグレタル人モ、吳竹ノ世々ニ聞エ、片糸ノヨリ〜ニ絶エズゾアリケ
 ル。茲ニ古ノ事ヲモ、歌ノ心ヲモ知レル人、僅ニ一人二人ナリキ、然アレド、
 コレカレ得タル所得ヌ所、互ニナム有ル、今此事ヲ云フニ、官位高キ人ヲ
 バタヤスキヤウナレバ入レズ。其外ニ近キ世ニ其名聞エタル人ハ、即チ
 僧正遍昭ハ歌ノ様ハ得タレドモ、誠少シ。云々、在原業平ハ其心餘リテ言

葉足ラズ、凋メル花ノ色無クテ、匂殘レルガ如シ。文屋康秀ハ言葉ハ巧ニ
 テソノ様身ニオハズ、云ハ、商人ノヨキ衣著タラムガ如シ。宇治山ノ僧
 喜撰ハ言葉幽カニシテ、始終タシカナラズ。云ハ、秋ノ月ヲ見ルニ、曉ノ
 雲ニアヘルガ如シ。詠メル歌多ク聞エネバ、彼此ヲ通ハシテヨク知ラズ。
 小野小町ハ古ノ衣通姫ノ流ナリ。哀ナル様ニテ強カラズ。云々、強カラヌ
 ハ女ノ歌ナレバナルベシ。大伴黒主ハ其様卑シ。云ハ、薪負ヘル山人ノ
 花ノ陰ニ休メルガ如シ。此外ノ人々ソノ名聞エル野邊ニ生フルカヅラ
 ノ道ヒ廣ゴリ、林ニ茂キ木ノ葉ノ如クニ多カレド、歌トノミ思ヒテ、其様
 知ラヌナルベシ。.....

今様・朗詠・催馬樂

今様
 中古ノ謠ヒ物ニハ、今様・朗詠・催馬樂アリ。今様トハ七五四句
 ヨリ成レル歌曲ニテ、彼伊呂波歌モ其一ナリ。此期ノ中葉以

朗詠

催馬樂

神樂

後盛ニ行ハレ、白拍子ノ舞ニハ之ヲ歌ヒタリトゾ。朗詠トハ初ハ詩賦中ノ佳句ヲ日本風ニ吟シタルモノナレドモ、後ニハ和歌ヲモ吟ズルコト、ナリテ、和漢朗詠集ナド世ニ出デタリ。コハ公任ノ撰ナリトイフ。催馬樂ハモト民間ノ俗謠ナリシニ、後ニハ唐樂ノ音律ニ合セテ節譜ヲ定メ、月ノ宴花ノウタゲニハ、盛ニ誦セラレタリ。
上古以來神樂トイフコトアリシガ、此時代ニハ神樂歌ト云フモノ出デ來テ、神樂ノ時ニ神前ノ儀式ニ伴ヘル歌ト餘興ノ歌トノ二種アリシガ、催馬樂ハ此餘興ノ歌ト性質ヲ同シウスト云フ。

今様舊キ都

舊キ都ニ來テ見レバ、
月ノ光ハ隈ナクテ、

淺茅ガ原トゾ荒レニケル。
秋風ノミゾ身ニハシム。

後徳大寺實定

今様蓬萊山

蓬萊山ニハ千歳フル、
松ノ枝ニハ鶴巢クヒ、

萬歳千秋カサナレリ。
巖ノ岨ニハ龜遊ブ。

催馬樂澤田川

一段澤田川、袖ツクハカリ淺ケレド、ハレ
二段アサケレド、久邇ノ宮人高橋渡ス。
三段アハレ其處ヨシヤ、高橋渡ス。

同老鼠

西寺ノ老鼠若鼠御裳喰ンヅ、袈裟喰ンヅ。法師ニ申サン、師ニ申セ。法師ニ申サン、師ニ申セ。

散文

近世・近古ノ擬古文ハ、全ク此時代ノ散文ヲ學ビタルモノナリ、故ニ此時代ノ散文ヲ特ニ雅文トモ云ヘリ。

今鏡大鏡

榮花物語

紫式部日記

土佐日記

彼水鏡・増鏡ナドノ粉本タリシモノハ、今鏡・大鏡ナリ。甲ハ高倉天皇ヨリ派リテ、後一條天皇迄、乙ハ之ヨリ更ニ派リテ、文德天皇迄ノ歴史ニテ、大鏡ハ藤原爲業ノ著ナリトイフ。國文ニテ記シ、歴史ノ始ナリ。此等ガ紀傳體ナルニ對シテ、編年體ノニ榮花物語アリ。宇多天皇ノ寛平年中ヨリ、堀河天皇ノ寛治年中迄ヲ記セリ。赤染衛門ノ作ナリトイヘド、明カナラズ。當時官媛ナドノ日記ヲ補綴シテ成レルナラム。日記又少カラズ。讚岐典侍日記・和泉式部日記・紫式部日記・蜻蛉日記等コレナリ。紫式部日記尤モ名アリ。日記ノ名ニテ紀行ナルアリ。更科日記・土佐日記コレナリ。土佐日記ハ紀貫之ガ土佐ノ任ハテ、歸レル時ノ日記ナルガ、國文未ダ盛ナラザリシ世トテ、憚ル所ヤアリケム、女ノ書ケル風ニ裝ヒタリ。

源氏物語

竹取物語

而シテ散文ノ大部分ヲナセル者ハ物語ナリ。落窪物語・濱松中納言物語・トリカヘバヤ物語・狹衣ナド何レモ有名ナレド、紫式部ノ源氏物語ヲ泰斗トス。此物語ハ先光源氏ト紫上トヲ男女ノ兩主人公トシ、事々物々善盡シ美盡セル境遇ヲ寫シ、後ニハ薰大將ト浮舟トヲ以テ、之ニ代ヘ、失敗破綻累リニ至レル生活ヲ以テ、前ノ局面ヲ變化セシメ、全篇五十四帖ヨリ成リタル巨篇ナレドモ、其脈絡毫モ亂レズ、人物活動シ、文章穩麗ナルハ、何タル才筆ゾヤ。カ、ル天才ヲ有シナガラ、其日記ニ徵スレバ、毫モ才學ヲ銜ハズ、温良粹正ナル一歸人ナリシハ、洵ニ稱スベシ。式部ハ藤原爲時ノ女ニテ、早ク夫ニ別レテ寡居セシガ、後一條ノ中宮上東門院ニ仕フ。長女大貳三位ハ狹衣ノ著者ナリ。之ニ先ダチテハ空穗物語・竹取物語アリ。竹取ハ伊勢物語ト

伊勢物語

共ニ國文ノ祖ナリト稱セラレ。伊勢物語ハ歌ヲ主トセルモノナレドモ、片々ノ記事自ラ首尾ヲ成シテ、在原業平ノ一生ヲ叙シタレバ、架空ノ物語ニハアラズ。大和物語ハ主トシテ和歌ニ關係アル古今ノ小話ヲ集メタルモノナリ。

枕草子

飄逸ノ文ヲ以テ、源氏物語ノ穩麗ナルニ對スベキハ枕草子ナルベシ。コハ清少納言ノ隨筆ニシテ、其銳キ眼ニテ觀察シタル事物ヲ、巧ナル筆ニテ評隲シ、輕秀奔放ノ妙ヲ極メタリ。少納言ハ清原元輔ノ女ニシテ、一條ノ皇后定子ニ仕ヘテ寵遇セラレシガ、後零落シテ終フル所ヲ詳ニセズ。コ、ニ一ツ注意スベキコトアリ。物語類ノ文章ハ、何レモ彫琢ヲ加ヘテ、普通ノ言語談話ヨリハ、稍遠カリタルモノナリシナラム。サルカラニ是等ノ文章ヲ摸倣セル大鏡ヨリモ前

平假字

漢詩漢文ノ隆盛

ダチテ出デタル今昔物語ニハ、却テ既ニ漢語ノ分量モ多ク、用辭モ亦平易ナリ。是ニ由リテ觀レバ、擬古文ト和漢混和文トノ二潮流ハ、既ニ中古時代ヨリ存セリトイフベシ。今昔物語ガ種々ノ傳話ヲ集メタルハ、大和物語ニ似タリ。サテ又竹取伊勢物語ハ、大ニ世ニ稱道セラレタリトハ云ヘ、斯クマデ國文ヲ振ハシメシハ、貫之ノ力ナルベシ。貫之ハ歌ニ秀デ、書ヲ能クシ、且國文ニ妙ナリシカバ、漢文漸ク衰ヘムトセシ時運ニ乗ジテ、此隆盛ヲ見サシメシナリ。然レドモ又假字起リテ記載ノ法簡易トナリシニモ原因セルコト、上ニイヘルガ如シ。平假字ヲ伊呂波歌ニ組ミ立テシハ、僧空海ナリト傳ヘラル。空海ハ此時代ノ始ノ人ナリ。其頃學問トシイヘバ、漢學ノミニテ、漢文ニテ書ケル歴史(三代實錄・文德實錄・續日本後紀・日本後紀・續日本紀・勅命ニテ撰バレ、漢文漢詩ノ

撰集菅家文章・性靈發揮集・文華秀麗集・經國集・頻リニ世ニ出
デタリキ。而シテ學術ハ菅原道真・都良香・小野篁・紀長谷雄・淡
海三船等ヲ巨擘トス。
サテ漢學廢レテ後モ男子ハナホ漢文ノ形ヲ尙ビシカバ、終
ニカノ記録文トイフモノ起ルニ至リヌ。

夢タガヒ

大カタ、此九條殿イトタマハ人ニハオハシマサヌニヤ。思ヒ召シ寄ル行末
ノ事ナドモ、叶ハヌハ無クゾオハシケル。口惜シカリケル事ハ、未ダイト
若クオハシマシケル時、夢ニ朱雀門ノ前ニ、左右ノ足ヲ西東ノ大宮ニサ
シヤリテ、北向キニテ内裏ヲ抱キテ立テリ。トナム見エツル。ト仰セラレ
ケルヲ、御前ニ生サガシキ女房ノ候ヒケルガ、イト御股痛ウオハシマシ
ツラム。ト申シタリケルニ、御夢違ヒテ、斯ク御子孫ハ榮エサセ給ヘド、攝
政關白エシオハシマサズナリニシ、又御末ニ思ハズナル御事ノウチ交

リ帥殿ノ御事ナドモ、是ガ違ヒタル故ニ侍ルメリ、イミジキ吉左右ノ夢
モ惡シザマニ合ハセツレバ違フ、ト昔ヨリ申シ傳ヘテ侍ルコトナリ、荒
涼シテ心知ラザラム人ノ前ニテ、夢語リゾ、此聞カセ給フ人々、シオハシ
マサマレ。

(大鏡)

一條院若宮ト對面シ給フ

カクテ日頃經レド猶イト包マシゲニ思シ召サレテ、神無月ノ十日アマ
リ迄ハ御帳ヨリ出デサセ給ハズ、殿夜晝ワカズ此方ニ渡ラセ給ヒツ、
宮ヲ御乳母ノ懷ヨリカキ抱キ給ヒテ、エモ云ハズ思シタルモ、實ニ
ト見エ給フ、御シトナドニ滯レテモ嬉シゲニゾ思サレケル。斯ク云フ程
ニ行幸モ近ウナリヌレバ、殿ノ内ヲ萬ニ繕ヒ磨カセ給フ、見所アリ、見ル
ニ怪シウ、法華經ノナハスラム様ニ、老離リ延命ブラム、ト覺ユル殿ノ有
様ニナム。カクテ若宮ヲ覺束ナウエカシウ内ニ思ヒ聞エサセ給フニヨ
リテノ行幸ナレバ、前々ノヨリモ殿ノ御前イミジウ急ギ立テ、何時シカ
トノミ思ヒ急ガセ給フニ、安キイモ大殿籠ラズ、此ノ御事ヲノミ御心ニ
染ミ思サル、ゾ、實ニモ有リヌベキ。中略殿、若宮抱キ奉ラセ給ヒテ、御前

ニ率テ奉ラセタマフ、御聲イト若シ、上ノ見奉ラセ給フ御心地思ヒヤリ
 聞エサスベシ、是レニツケテモ、一ノ御子ノ生レ給ヘリシ折、トミニモ見
 ズ聞カザリシハヤ、ナホ筋ナシカ、ル筋ニハ唯頼モシウ思フ、人ノ有ラ
 ムコソカヒガヒシウ有ルベカメレ、イミジキ國王ノ御位ナリトモ、後見
 モテハヤス人ナカラムハワリ無カルベキ業カナ、ト思サル、ヨリモ、行
 末マデノ御有様ドモノ思シツマケラレテ、先人知レズ哀レニ思シ召サ
 レケリ。無下ニ夜ニ入りヌレバ、萬歳樂太平樂賀殿ナド舞、様々ニ樂ノ聲
 フカシキニ、笛ノ音モ鼓ノ音モ面白キ松風吹キ澄マシテ、池ノ浪モ聲ヲ
 唱ヘタリ、萬歳樂ノ聲ニ合ヒテ、ト若宮ノ御聲ヲ聞キテ、右大臣モテハヤ
 シ聞エ給フ。左衛門督、右衛門督、萬歳千秋ナド諸聲ニテ誦シ給フ。主ノ大
 殿先々ノ行幸ヲナドメデタシト思ヒ侍リケム、カ、ル事モアリケルモ
 ノヲ、ト打チヒソミ給フヲ、サラナル事ナリト殿原同ジ心ニ御目ノゴヒ
 給フ。

(榮花物語)

盜難

ツゴモリノ夜、追儼ハイト早ク果テヌレバ、鐵槩ツケナドハカナキツク

ロヒドモストテ打解ケ居ルニ、辨ノ内侍來テ物語シテ臥シ給ヘリ。内匠
 ノ藏人ハ長押ノ下ニ居テ、アテキガ縫フ物ノカサネヒネリ教ナドツク
 ズクトシ居タルニ、御前ノ方ニイミジク晉ル。内侍起セドトミニモ起キ
 ズ、人ノ泣キ騒グ音ノ聞ユルニイト忌々シク物モ覺エズ、火カト思ヘド
 サニハアラズ、内匠ノ君イザトト先ニ立テ、トモカウモ宮下ニオハ
 シマス、先參リテ見奉ラムト、内侍ヲ荒ラカニ突キ驚カシテ、三人震フ震
 フ足モ空ニテ參リタレバ、裸體ナル人ゾ二人居タル、靱負、小式部ナリケ
 リ。カクナリケリト見ルニイヨクムクツケシ。御厨子所ノ人モ皆出デ、
 宮ノ侍モ、瀧口モ、雛ハテケルマ、ニ皆罷リ出デケリ。手ヲ叩キ晉レド答
 スル人モナシ、御膳宿ノ刀自ヲ呼ビ出デタルニ、殿上ニ兵部丞トイフ藏
 人ヨベト恥モ忘レテ口ツカラ云ヒタレバ、尋ネケレド罷出ニケリ。
 ツラキコト限ナシ、式部丞スケナリゾ參リテ、處々ノ差、油ドモ唯一人差
 シイレラレテアリク、人々物覺エズ對ヒ居タルモアリ。上ヨリ御使ナド
 アリ、イミジウ恐シウコソ侍リシカ、納殿ニアル御衣取り出デサセテ、此
 人々ニ給フ。朔日ノ裝束ハ取ラザリケレバ、サリ氣モ無クテ有レド、裸姿

ハ忘ラレズ、恐シキモノカラヲカシウトモ云ハズ、言忌モシアヘズ。

(紫式部日記)

清少納言ノ評

清少納言コソシタリ顔ニイミジウ侍リケル人。サバカリサカシダチ、眞字書キ散ラシテ侍ル程モ能ク見レバ、マダイト堪ヘヌ事多カリ。斯ク人ニ異ナラムト思ヒ好メル人ハ必ズ見劣リシ、行末ウタテノミ侍レバ、艶ニナリヌル人ハ、イト凄ウスマロナル折モ、物ノ哀ニス、ミ、ヲカシキ事モ見過サヌ程ニ、オノヅカラサルマジクアダナル様ニモナルニ侍ルベシ。其アダニナリヌル人ノ果、争デカハ善ク侍ラム。(同上)

正月七日

七日ニナリヌ、同ジ凄ニアリ。今日ハ青馬ヲ思ヘド甲斐ナシ、唯浪ノ白キゾ見ユル。中略今破子持タセテ來タル人、ソノ名ナドゾヤ今思ヒ出デム、此人歌詠マムト思フ心アリテナリケリ、トカク云ヒ、テゾ浪ノ立ツナルコト、憂ヒイヒテ、詠メル歌

行ク先ニ立ツ白浪ノ聲ヨリモ後レテ泣カム吾ヤマサラム

トゾ詠メル。イト大聲ナルベシ、持テ來ル物ヨリハ歌ハ如何有ラム。此歌ヲコレカレアハレガレドモ、一人モ返シセズ、シツベキ人モ交レ、ドモ之ヲノミイタガリ、物ヲ飲ミ食ヒテ夜更ケヌ。此歌主マダ能ラズトイヒテ立チヌ。或人ノ子ノ童ナル密ニ云フ、マロ、此歌ノ返シセムト云フ、驚キテ、イトヲカシキ事カナ、詠ミテムヤハ、詠ミツベクハ早云ヘカシ、ト云フニ、マカラズトテ起チヌル人ヲ待チテ詠マム、トモトメケルヲ、夜更ケヌトニヤアリケム、ヤガテ往ニケリ。抑、イカヤ詠ミタル、ト訝カリテ問フ、此童サスガニ耻ヂテ云ハズ、強ヒテ問ヘバ云ヘル歌

行ク人モ留マルモ袖ノ涙川ミギハノミコソ濡レマサリケレトナム詠メル。斯クハイフモノカ、ウツクシケレバニヤ有ラム、イト思ハズナリ、童言ニテハ何かハセム、媼翁ニヲシツベシ、惡シクモ有レ、イカニモ有レ、便アラバ遣ラムトテ置カレヌメリ。(土佐日記)

圍棋

サテ(光源氏)向ヒ居タラムヲ見バヤト思ヒテ、ヤヲラ歩ミ出デ、藤ノハマニ入り給ヒヌ。此入りツル格子ハマダサ、ネバ、隙見ユルニヨリテ、

西ザマニ見通シ給へバ、此際ニ立テタル屏風モ端ノ方押シ疊マレタルニ、紛ルベキ木丁ナドモ暑ケレバニヤウチ掛ケテ、イト能ク見入レラル。灯近ウ燈シタリ。母屋ノ中柱ニソバメル人ヤト、先目留メ給へバ、濃キ綾ノ單重ネナメリ、何カ有ラム上ニ著テ、頭ツキ細ヤカニ、小サキ人ノ物ゲナキ姿ゾシタル顔ナドハ差シ向ヒタル人ナドニモ態ト見ユマジウモテナシタリ。手ツキ瘦々トシテ痛ウ引キ隠シタメリ。今一人ハ東向キニテ、殘ル所ナク見ユ、白キ薄物ノ單重ネニ藍ノ小袷ダツ物葎ロニ著成シテ、バウソクナルモテナシナリ。イト白ウツブ〜ト肥エテ、ソヤ口カナル人ト、頭ツキ額ツキ物鮮カニ、マミ口ツキイト愛嬌ヅキ、花ヤカナル形ナリ。髪ハイト房ヤカニテ、長クハアラネド、下_カリハ肩ノ程イト清ゲニ、スベテイト拗ケタル所ナク、ヲカシゲナル人ト見エタリ。宜クエソ親ノ世ニ無クハ、思フラメトヲカシク見給フ、心地ゾ猶靜カナル氣ヲ添へバヤトフト見ユル、オナキ者ニハアルマジ。碁打チハテ、鬨_カサスワタリ心敏ゲニ見エテ、キハ〜シウサウドケバ、奥ノ人ハイト靜ニノドメテ、待チ給へヤ、其處ハ持ニコソ有ラメ、此ワタリノ劫ヲ、ナド云へド、イデ此度ハ

負ケニケリ、隅ノ處々イデ〜トオヨビラ屈メテ、十_ハ廿_ハ三十_ハ四十_ハナド數フル様、伊豫ノ湯桁モタド〜シカルマジウ見ユ。(源氏物語)

賢キ女

「マダ文章生ニ侍リシ時、賢キ女ノタメシヲナム見給へシ、公ケ事ヲモ云ヒ合ハセ、私様ノ世ニ住マフベキ心オキテヲ、思ヒ運ラサム方モイタリ深ク、オ_ノキハ生々ノ博士恥カシク、スベテ口アカスベクナム侍ラザリシ、云々イトアハレニ思ヒウシロミ、朝夕ノ語ラヒニモ身ノオツキ公ケニ仕フマツルベキ道々シキ事ヲ教ヘテ、イト清ゲニ消息文ニモ假_カ字トイフ物ヲ書キ交ゼズ、ウベ〜シク云ヒ回シ侍ルニ、其者ヲ師トシテナムワツカナル腰折文作ルコトナド習ヒ侍リシカバ、今ニ其恩ハ忘レ侍ラネド、ナツカシキ妻子トウチ頼マムニ、無才ノ人ナマワロナラム振舞ナド見ユムニ、恥カシクナム見ユ侍リシ、ト申セバ、殘リヲ云ハセムトテ「サテ〜ヲカシカリケル女カナ、トスカイ給フヲ、心ハ得ナガラ、鼻ノワタリヲコツキテ語リナス。」

子安貝

(同上)

日暮レヌレバ、彼寮ニオハシテ見給フニ、試ニ燕巢作レリ。荒籠ニ人ヲ載セテ釣リ上ゲサセテ、燕ノ巢ニ手ヲサシ入レサセテ探ルニ、物モ無シト申スニ、中納言惡シク探レバ、無キナリト腹立チテ、誰バカリ覺エムニトテ、我昇リテ探ラム、トノタマヒテ籠ニ乗リテ、釣ラレ昇リテ窺ヒ給ヘルニ、燕尾ヲ捧ゲテイタク廻ルニ合セテ、手ヲサ、ゲテ探リ給フニ、手ニ平メル物サハル時ニ、ソレ物握リタリ、今ハ下ロシテヨ、翁爲得タリ、トノタマヒテ、集リテ疾ク下ロサムトテ、綱ヲ曳キ過シテ、綱絶ユル即チ八島ノ鼎ノ上ニノケ様ニ落チ給ヘリ。人々アサマシガリテ、寄リテ抱キ奉レリ、御目ハ白眼ニテ臥シ給ヘリ、人々御口ニ水ヲスクヒ入レ奉ル、辛ウジテ息出デ給ヘルニ、マタ鼎ノ上ヨリ手取り足取りシ下ゲオロシ奉ル。辛ウジテ、御心地如何思サル、ト問ヘバ、息ノ下ニテ、物ハ少シ覺エレド、腰ナム動カレヌ。サレド子安貝ヲフト握リ持タレバ嬉シク覺ユルナリ、先脂燭サシテ來、コノ貝顔見ム、ト御頭モタゲテ御手ヲ廣ゲ給ヘルニ、燕ノマリ置ケル古囊ヲ握リ給ヘルナリケリ。ソレヲ見給ヒテ、アナ、貝無ノワザヤ、トノ給ヒケルヨリゾ、思フニ違フコトヲバカヒナシトハ云ヒケル。貝

ニモアラズト見給ヒケルニ御心モ違ヒテ、唐櫃ノ蓋ニ入レラレ給フベクモアラズ、御腰ハ折レニケリ。

(竹取物語)

白玉カ何ゾ

昔男アリケリ、女ノ得逢フマジカリケルヲ、年ヲ經テ呼バヒ渡リケルヲ、辛ウジテ女ノ心合セテヌスミ出デ、イト暗キニ率テ往キケリ。芥川トイフ河ヲイキケレバ、草ノ上ニオキタリケル露ヲ、カレハ何ゾ、トナム男ニ問ヒケルヲ、往ク先遠ク夜モ更ケニケレバ、鬼アル所トモ知ラデ、神サヘイトイミジウ鳴リ、雨モ痛ウ降りケレバ、アバラナル倉ニ女ヲバ奥ニ押シ入レテ、男ハ弓胡篋ヲ負ヒテ戸口ニ居リ、早夜モ明ケナムト思ヒツ、居タリケルニ、鬼早女ヲバ一口ニ喰ヒテケリ、アナヤ、ト云ヒケレド、神ノ鳴ル騒ニエ聞カザリケリ。ヤウ、夜モ明ケ行クニ、見レバ率テ來シ女モナシ、足ヅリヲシテ泣ケドモ甲斐ナシ。

白玉カ何ゾト人ノ問ヒシ時露ト答ヘテ消ナマシモノヲ

(伊勢物語)

其人ノ後

庚申セサセ給ヒテ、内大臣殿イミジウ心設ケセサセ給ヘリ。夜ウチ更ク
 ル程ニ題出シテ、女房ニ歌讀マセ給ヘバ、皆ケシキダチユルガシ出スニ、
 宮ノ御前ニ侍ラヒテ、物啓シナド異事ヲノミ云フヲ、大臣御覽ジテ、ナド
 カ歌ハ讀マデ離レ居タル、題取レ、下ノ給フヲ、サル事承リテ歌讀ムマジ
 クナリテ侍レバ、思ヒカケ侍ラズ、異様ナル事、實ニサル事ヤハ侍ル、ナド
 カハ許サセ給フ、イトアルマ、ジキ事ナリ、ヨシ異時ハ知ラズ、今宵ハ讀メ、
 ナド責メサセ給ヘド、氣清ウ聞キモ入レデ侍ラフニ、異人ドモ詠ミ出シ
 テ、善シ惡シナド定メラル、程ニ、聊カナル御文ヲ書キテ賜ハセタリ。明
 ケテ見レバ

元輔ガ後ト云ハル、君シモヤ今宵ノ歌ニハヅレテハ居ル

トアルヲ見ルニ、ヲカシキ事ゾ類ナキヤ。イミジク笑ヘバ、何事ゾ、何事ゾ、
 ト大臣モノタマフ、

其人ノ後ト云ハレヌ身ナリセバ今宵ノ歌ハ先ヅ讀マ、シ
 ツ、ム事候ハズバ千歌ナリトモ是ヨリゾ出デマウデ來マシト啓シツ。

(枕草子)

ウツクシキ物

瓜ニ書キタル兒ノ顔、雀ノ子ノネズナキスルニ躍リクル、又紅ナドツケ
 テ居エタレバ、親雀ノ蟲ナドモテ來テク、ムルモ、イトラウタシ。三ツバカ
 リナル兒ノ、急ギテ這ヒ來ル道ニ、イト小サキ塵ナドノアリケルヲ、目敏
 ニ見ツケテ、イトヲカシゲナル指ニトラヘテ、大人ナドニ見セタルイト
 ウツクシ。アマニソギタル兒ノ、目ニ髮ノ覆ヒタルヲ搔キハ遣ラデ、ウチ
 傾キテ物ナド見ル、イトウツクシ。手緋ガケニ結ヒタル腰ノ上ノ白ウヲ
 カシゲナルモ、見ルニウツクシ。大キニハアラヌ殿上童ノ、サウゾギタテ
 ラレテアリクモウツクシ。ヲカシゲナル兒ノ、アカラサマニ抱キテ、ウツ
 クシム程ニ、カイツキテ寢入タルモラウタシ。雛ノ調度、逆ノ浮葉ノイト
 小サキヲ、池ヨリ取り上ゲテ見ル。葵ノ小サキモイトウツクシ。何モ何モ
 イト小サキ物ハイトウツクシ。イミジウ肥エタル兒ノ二ツバカリナル
 ガ、白ウウツクシキガ、二藍ノ薄物ナド衣長クテ、手緋アゲタルガ、這ヒ出
 デ來ルモ、イトウツクシ。八ツ九ツ十バカリナル男子ノ、聲幼ゲニテ文讀
 ミタル、イトウツクシ。雛ノ脚高ニ白ウヲカシゲニ衣短カナル様シ

テ、ヒヨ、トカシガマシク鳴キテ、人ノ後ニ立チテアリクモ、又親ノモトニツレ立チテアリク見ルモウツクシ。鳴ノ子、舍利ノ壺、撫子ノ花。同上

觀硯聖人在俗時值盜人語

今昔、兒共摩行シ觀硯聖人ト云者有キ、其ガ若クシテ在俗也ケル時、祖ノ家ニ有ケルニ、夜壺屋ニ盜人入スト人告ケレバ、云々、其時、觀硯密ニ盜人ニ起上テ我ガ脇ニ交テ出ヨ、糸惜ケレバ逃サムト思フゾ、ト云ケレバ、盜人和ラ起上リテ、觀硯ガ脇ニ付テ出ヅ。云々、其後、觀硯年來ヲ經テ東國ノ受領ニ付テ行ヌ、而ル間、要事有テ京ニ上ルニ、關山ノ邊ニシテ盜人ニ合ヌ、云々、主人ノ男ノ云ク、今二三日モ可御坐レドモ、京ニ疾ク御マサマ欲カラム、然レバ今日返ラセ給ヒネ、心モ得サセ不給ハ、靜心モ御サジ、ト云々、觀硯ヲ本ノ馬ニ乗セテ、人五六人許付テ返シ遣ケル。云々、妻子觀硯ヲ見テ喜ブ事無限、門ノ脇ニ置タリツル皮子ヲ二乍ラ取入テ開テ見レバ、一ツニハ文ノ綾十疋、美八丈十疋、疊綿百兩入タリ、今一ニハ白十六丈ノ細布十段、紺ノ布十段入タリ、底ニ立文有リ、披テ見レバ糸惡キ手ヲ以テ假名ニ此ク書タリ。

一トセノ壺屋ノ事ヲ思シ出ヨ、其事ノ于今難忘ケレバ、其畏ヲ可申方ノ不候ツル。此上ラセ給フ由ヲ承テ迎ヘ奉ル也、其喜サハ何レノ世ニカ忘レ申サム、其夜徒ニ成ナマシカバ、今マデ此テ侍ラマシヤハト思給ウレバ無限ナン。

ト書タリ。其時ニゾ觀硯被心得テ肝落居ケル。(今昔物語)

書齋記

菅原 道真

東京宣風坊有一家、々之坤、維有一廊、々之南、極有一局、々之開方、纔一丈餘、投歩者進退傍行、容身者起居側席、先是秀才進士出、自此局者、首尾略計近百人、故學者目此局爲龍門、又號山陰亭、以在小山之西也。戶前近側有一株梅、東去數步有數竿竹、每至花時、每當風便、可以優暢情性、可以長養精神、余爲秀才之始、家君下教曰、此爲名處也、鑽仰之間、爲汝宿廬、余即便移簾席以整之、運書籍以安之、嗟呼地勢狹隘也、人情崎嶇也、凡厥朋友有親有疎、或無心合之好、顏色如和、或有首蛇之嫌、語言似昵、或名聲蒙妄、開祕藏之書、或稱取謁、直突休息之座、又刀筆者寫書刊謬之具也、至于烏合之衆、不知其物之用、操刀則削損几案、弄筆亦汙穢書籍、又學問之道、抄出爲宗、抄出之用、蕪草

爲本、余非正平之才、未免停滯之筆、故此間在々短札者、總是抄出之藁草也、而闢入之人、其心難察、有智者見之、卷以懷之、無智者取之、破以棄之、此等之數事、內坎之切者也、自外之事、米鹽無量、又朋友之中、頗有要須之人、適依有用、入在籠中、闢入者不審、先入之有用、直容後來之不要、亦何亦何、可悲、可悲、夫董公垂帷、蔭子踏壁、非止研精之至、抑亦安閑之意也、余今作斯文、豈絕交之論哉、唯發悶之文也、殊慙、闢外不設集賢之堂、籠中徒設闢入之制、爲不知我者也、唯知我者、有其人三許人、恐避燕雀之小羅、而有鳳凰之增近矣、悚息、悚息、癸丑歲七月日記之。

(本朝文粹)

八月廿五日第四皇子於披香舍從吏部郎橋廣相始受蒙求便引
文人命宴賦詩並序

都良香

禮記入學之歲、過之者非進道之勤、義從師之方、遠之者非漸訓之故、研乎其志、所以披沙鍊金也、礪乎其心、所以琢玉成器也、學之爲益、不其然乎、皇子聰明在懷、日遠之對不敏、岐嶷居質、月初之談非奇、然猶以老成之量、致童蒙之求、誰其擊之者、橋廣相是也、保此元吉、故讀李參軍之書、就彼明賢、故稟橋侍郎之誨、誓冰之解、碧水之心、頓清若霧之開、青天之顏可視、於是宴命、綠觴、恩

喚墨客韻賜御管、歌吹驚於仙眠、舍在禁宮、講誦近於天耳、脫發跡於今日、當傳事於後人、不有詩章者乎、何爲不作焉、不有筆硯者乎、何爲不記焉、其辭曰
天生俊哲號天人、自就賢師問道真、今日童蒙皆擊盡、心臺一鏡遂無塵。

(扶桑集)

贈南山智上人

淡海三船

獨居窺卷側、知己在幽山、得意千年桂、同香四海蘭、野人披薛納、朝隱忘衣冠、副思何處所、遠在白雲端。

(經國集)

賦得隴頭秋月明

小野篁

反覆單于性、邊城未解兵、戍夫朝蓐食、戎馬曉寒鳴、帶水城門冷、添風角韻清、隴頭一孤月、萬物影云生、色滿都護道、光流似飛鶯、邊機候侵寇、應驚此夜明。

(同上)

將門傳聞此言、以承平五年十月廿一日、忽向彼國新治郡川曲村、則良正揚聲、如案打合、棄命各合戰、然而將門有運、既勝、良正無運、遂負也、射取者六十四人、逃隱者不知其數、然以其廿二日、將門歸於本鄉、爰良正竝因緣、伴類下兵、恥於他界、上敵名於自然、懸動寂雲之心、暗追疾風之影、然而依會替之深、

尚發敵對之心仍勸不足之由、舉於大兄之介、其狀云、雷電起響、是由風雨之助、鴻鶴凌雲、只資羽翮之用也、義被合力鎮將門之亂、惡然則國內之騷自停、上下之勳必鎮者、

(將門記)

四、上古文學

概論

奈良朝ノ末ヨリ以前ヲ、コヽニ汎稱シテ上古トイフ。此間ニハ三箇ノ大事件アリタリ。一ニハ大化ノ新政ナリ。吾國武強質樸ノ風ヲ移シテ、文縟豪華ノ端ヲ啓キシハ、實ニ此新政ニシテ、奈良朝七十年間ノ文化モ、コヽニ胚胎セリ。二ニハ佛法ノ渡來ナリ。佛教無常ノ觀念ガ、國民ノ思想ニ浸染シテ、文學ノ上ニ著シク表レシハ、中古若クハ近古ニ在レドモ、此時代ノ末ノ著作ニハ、既ニ其佛ヲ認ムベキモノナキニ非

ズ。三ニハ漢學ノ傳來ナリ。コヽハ最モ古ク紀元九百五十年比佛法ノ渡來比ハ、ノ事ニ屬シ、且其尊王敬祖ノ主義ハ我國古來ノ倫理ト一致シタレドモ、文字ニ至リテハ國語ト系統ヲ異ニセル言語ヲ寫サムガ爲ニ出來シ者トテ、頗ル事宜ニ適セザリケム、三百年ヲ經テ漸ク國語ヲ記載スルニ至リ、竟ニハ假字ノ發明トナリテ、始テ十分ニ吾用ヲナスコト、ナリヌ。今コノ時代ノ文學ヲ類別スルコト左ノ如シ。

律語……和歌

散文

和歌

コノ時代ニハ、歌集ハ萬葉集アルノミ、上雄略天皇ヨリ、下天平寶字年中マデノ、貴賤僧俗ノ歌ヲ、遍ク網羅シテ、長歌・短歌・

旋頭歌ノ別アリ。而シテ之ガ編者ハ大伴家持ナラムトイフ。此集ノ記載法ハ假字發明以前ノ記載ノ有様ヲ窺フニ足ルベク、漢字ノ音又ハ訓ヲ用非テ巧ニ國語ヲ寫シ、ソノ甚シキニハ戲訓トイフモノサヘアリ。是ソノ後ニ假字ノ起ルベキ濫觴ナリ。

萬葉集ノ作者

作者ノ中ニテ尤有名ナルヲ家持ソノ父旅人山上憶良山邊赤人柿本人丸等トス。家持父子ハ武門ノ名族ナルニ天平以後世ハヤウ、文弱ニ流レ、藤原氏政ヲ專ニセム風サヘ見エタル時ニ遇ヒタレバ、父子ノ詠ニハ慷慨ノ氣アル者多シ。憶良ハ文武ノ朝ニ仕ヘ、漢文ニモ長シテ、遺唐少錄トナリタルコトアリ。赤人ハ聖武天皇ノ比ノ人ナレバ、憶良ヨリ晚ク、人丸ハ持統天皇ノ比ナレバ、憶良ヨリ早キガ、其履歷俱ニ詳カナラズ。歌詠ニ徵スルニ、何レモ御幸ニ隨ヒテ近畿ニ遊ビ、

赤人ハ東國ニ下リテ、不二ノ高根ヲ賞シ、伊豫ニ至リテ道後ノ靈泉ニ浴シ、人丸ハ始ハ高市新田部ノ諸皇子ニ仕ヘ、終ニハ石見ニテ客死セルモノ、如ク、俱ニ千古ノ歌聖ト稱セラ

ル。此集以前ノ歌ハ、日本書紀古事記等ノ中ニ遺レリ。折節ノ感情ヲ直ニ陳ベタルマデニテ、思想ハ極メテ單純ナレドモ、修辭ノ方法ハ、サスガニ後世ノ法門トナレルモノ、既ニコ、ニ萌セリ。

喻族歌

比左加多能安麻能刀比良岐多可知保乃多氣爾阿毛理之須賣呂岐能加美能御代欲利波自由美乎多爾藝利母多之麻可胡也乎多波左美蘇倍且於保久米能麻須良多祁乎々佐吉爾多且由伎登利於保世山河乎伊波爾左久美豆布美等保利久爾麻婁之都々知波夜夫流神乎許等牟氣麻都呂

大伴家持

倍奴比等乎母夜波之波吉伎欲米都可倍麻都里豆安吉豆之萬夜萬登能
 久爾乃可之婆良能宇禰備乃宮爾美也婆之良布刀之利多豆氏安米能之
 多之良志賣志祢流須賣呂岐能安麻能日繼等都藝豆久流伎美能御代御
 代加久佐波奴安加吉許己呂乎須賣良弊爾伎波米都久之豆都加倍久流
 於夜能都可佐等許等太豆氏佐豆氣多麻敵流宇美能古能伊也都藝都岐
 爾美流比等乃可多里都藝豆氏伎久比等能可我見爾世武乎安多良之伎
 吉用伎會乃名會於煩呂加爾己許呂於母比豆牟奈許等母於夜乃名多都
 奈大伴乃宇治等名爾於敵流麻須良乎能等母。
 之奇志麻乃夜末等能久爾々安伎良氣伎名爾於布等毛能乎己許呂都刀
 米與。
 都流藝多知伊與々刀具倍之伊爾之敵由佐夜氣久於比豆伎爾之會乃名
 會。

讚酒歌

大伴旅人

酒名乎聖跡負師古昔大聖之言乃宜左。
 古之七賢人等毛欲爲物者酒西有良師。

思子等歌

山上憶良

宇利波米婆胡藤母意母保由久利波米婆麻斯提斯農波由伊豆久欲利枳
 多利斯物能會麻奈迦比爾母等奈可利提夜周伊斯奈佐農。
 銀母金母玉母奈爾世武爾麻佐禮留多可良古爾斯迦米夜母。

望不盡山歌

山部赤人

天地之分時從神左備而高貴寸峻河有布士能高嶺乎天原振放見者度日
 之陰毛隱比照月乃光毛不見白雲母伊去波伐加利時自久會雪者落家留
 語告言繼將往不盡能高嶺者。

過近江荒都時歌

柿本人麻呂

玉手次敵火之山乃樞原乃日知之御世從阿禮座師神之盡櫻木乃彌繼
 繼爾天下所食乎天爾滿倭乎置而青丹吉平山乎越何方御念食可天離夷
 者雖有石走淡海國乃樂浪乃大津宮爾天下所知食兼天皇之神之御言能
 大宮者此間等雖聞大殿者此間等雖云春草之茂生有霞立春日之霧流百
 破城之大宮處見者悲毛。

樂浪之思賀之幸崎雖幸有大宮人之船麻知兼津。
左散難彌乃志賀能大和多與村六友昔人二亦母相目八毛。

(以上萬葉集)

雄略天皇御製

美延斯怒能袁牟漏賀多氣爾志斯布須登多禮會意保麻倍爾麻袁須夜須
美斯志和賀淤富岐美能斯志麻都登阿具良爾伊麻之斯漏多問能蘇豆岐
蘇那布多古牟良爾阿牟加岐都岐會能阿牟袁阿岐豆波夜具比加久能基
登那爾淤波牟登蘇良美都夜麻登能久爾袁阿岐豆志麻登布(古事記)

神武天皇御製

伽牟伽筮能伊齊能于彌能於費異之珥夜異波臂茂等倍履之多優彌能之
多優彌能阿誤豫阿誤豫之多太彌能異波比茂等倍離于智豆之夜莽務于
智豆之夜莽務。

(日本書紀)

散文

片假字

片假字ノ發明ハ、ヤウヤク此時代ノ末ナリケレバ、アラユル
散文モナホ萬葉風ノ記載法ナリ。片假字ヲ五十音圖ニ組ミ
立テタルハ、世ニ吉備眞備ナリト傳フ。漢字ノ用繁クナルニ
ツレテ、自然ニ略字ヲ用非、點畫ヲ省クニ至リタレバ、遂ニ漢
字ノ偏旁ノミヲ取リテ、此音圖ヲ作りタルモノナルガ、片假
字ノ形モ、コ、ニ略一定スルニ至レリ。

日本書紀

上ニイヘル日本書紀三十卷ハ、舍人親王勅ヲ奉シテ撰ビシ
モノニテ、中古時代ノ勅撰五史ト合セテ、六國史トイハル。此
書ハ漢文ニテ開闢以來文武天皇マデノ事ヲ記シタリ。又古
事記三卷ハ太安麻侶ノ手ニ成リ、亦開闢ヨリ推古天皇迄ヲ
記セリ。安麻侶ハ書紀ノ修撰ニモ與リテ、立派ナル漢文家ナ
リシガ、古傳説ノ眞ヲ傳ヘムガ爲ニ、困難ヲ犯シテ、國語ノマ
マヲ寫サム文體ヲ用非シニ、唐土崇拜ノ時尚ハ、之ニ満足セ

古事記

祝詞宣命

風土記氏文

ズシテ、書紀ノ勅撰ヲ見ルニ至リシナリ。
コ、ニ又祝詞宣命トイフモノアリ。宣命トハ君命ヲ下ニ宣
リ傳フル詔勅ニシテ、祝詞トハ神明ニ奏スル詞ナリ。トモニ
縁語ヲ引キ、對句ヲ用非、或ハ枕詞ヲ加ヘテ、典雅ノ妙ヲ極メ
タリ。
コノ他風土記氏文アリ。風土記ハ地名ノ由來、舊聞、異事ヲ採
録シテ、奉ラシメラレタル時ニ成レルモノニテ、今日現存セ
ルハ常陸・出雲等五箇國ノミ。
コノ風土記古事記等ハ、何レモ形コソ漢文ナレ、其音調ハ自
ラ國文ノ姿ヲ見セリ。其以前ニハ却リテ十七憲法ノ如キ純
粹ナル漢文モアリ。又弘文天皇ノ頃ヨリハ詩モ行ハレタリ。

藤原永手薨時宣命

藤原左大臣爾爾大命乎宣大命坐詔久大臣明日者參出來仕待比賜
間用休息安豆參出須事波無天皇朝乎置而罷退止聞看而於母富
於與豆禮多波許止加云信之有者仕奉之大政官之政波誰任
之加罷伊麻須孰授罷伊麻須恨悲朕大臣誰加我語比佐氣牟
孰爾加我問比佐氣牟悔彌情彌痛彌酸彌大御泣哭之坐止詔大命乎宣悔
母加惜自今日者大臣之奏之政者不聞看夜成牟自明日者大臣之仕奉
儀者不看行夜成牟月日累往悲事乃未彌可起歲時積往麻爾佐
夫之岐事乃未彌可益加朕大臣春秋麗色波誰俱加見行弄賜牟山川
淨所者孰俱加見行阿加良間賜止歎賜比愛賜比大坐々止詔大命乎宣
美麻之大臣乃萬政總以無怠緩事無曲傾事久王臣等彼此別心無普
平奏比公民之上廣厚慈而奏事此耳不在天皇朝乎暫之間母罷出而
休息安母事無食國之政乃平善可在狀天下公民之息安倍岐事乎旦夕夜

日不云思議奏比仕奉者歎美明美意太比之美多能母志美思保之大坐々
間覺忽朕朝乎離而罷禮波言年須部毋無爲年須部毋不知爾悔備賜和
備賜比大坐々止詔大命乎宣又事別詔久仕奉志事廣美厚美彌麻之大臣
之家內子等母波布理不賜失不賜慈賜波起賜波温賜波省賜波美麻之大
臣乃罷道母字之呂輕久心母意太比爾念而平久幸久罷止富良須止詔
大命乎宣。

大祝詞ノ未段

如此出波天津宮事以氏大中臣天津金木乎本打切未打斷氏千座置座爾
置足波志天津管曾乎本蒞斷未蒞切氏八針爾取辟氏天津祝詞乃太祝詞
事乎宣禮如此久乃良波天津神波天磐門乎推披氏天之八重雲乎伊頭乃
千別爾千別氏所聞食武國津神波高山之末短山之末爾上坐氏高山之伊
穗理短山之伊穗理乎播別氏所聞食武如此所聞食波皇御孫之命乃朝廷

(續日本紀)

乎始氏天下四方國罪止云布罪波不在止科戶之風乃天之八重雲乎吹
放事之如久朝之御霧夕之御霧乎朝風夕風乃吹掃事之如久大津邊爾居
大船乎舳解放舳解放氏大海原爾押放事之如久彼方之繁木本乎燒鎌乃
敏鎌以氏打掃事之如久遺罪波不在止被給比清給事乎高山末短山末
佐久那太理爾落多支都速川能瀬爾坐須瀬織津比咩止云神大海原爾持
出武如此持出往波荒沙之沙乃八百道乃八沙道乃八百會爾座須速開都
比咩止云神可々吞武如此久可々吞波氣吹戶坐須氣吹戶主止云神根國
底之國爾氣吹放氏如此久氣吹放波根國底之國爾坐速佐須良比咩登云
神持佐須良比夫氏

常陸風土記ノ一節

昔祖神尊巡行諸神之處到駿河國福慈岳卒遇日暮請欲宿宿此
時福慈神答曰新粟初營家內諱忌今日之間冀許不堪於是祖神尊恨泣嘗
告曰即汝親何不欲宿汝所居山生涯之極冬夏霜冷寒重農人民不登飲

食勿食者更登筑波岳亦請容止此時筑波神答曰今夜雖新嘗不敢
不奉尊旨爰設飲食敬拜祇承於是祖神尊默然謂曰愛乎我胤巍哉神
宮天地竝齊日月共同人民集賀飲食富豐代々無絕日々彌榮千秋萬歲
遊樂不窮者是以福慈岳常雪不得登臨其筑波岳往集歌舞飲喫至于
今不絕也

日本書紀ノ一節

素盞鳴尊立化奇稻田姬爲湯津爪櫛而插於御髮乃使脚摩乳手摩乳釀八
醞酒併作假度八間各置一口槽而盛酒以待之也至期果有大蛇頭尾各
有八岐眼如赤酸醬松柏生於背上而蔓延於八丘八谷之間及至得酒頭各
入一槽飲醉而睡時素盞鳴尊乃拔所帶十握劍寸斬其蛇至尾劍及少缺
故割裂其尾視之中有一劍此所謂草薙劍也素盞鳴尊曰是神劍也吾何
敢私以安乎乃上獻於天神也

古事記ノ一節

故速須佐之男命乃於湯津爪櫛取成其童女而刺御美豆良告其足名椎手
名椎神汝等釀八鹽折之酒且作廻垣於其垣作八門每門結八佐受

岐每其佐受岐置酒船每船盛其八鹽折酒而待故隨告而如此設
備待之時其八僕遠呂智信如言來乃每船垂入己頭飲其酒於是飲醉死由
伏寢爾速須佐之男命拔其所御佩之十拳劍切散其蛇者肥河變血而
流故切其中尾時御佩之乃毀爾思怪以御刀之前刺割而見者在都牟刈
之太刀故取此太刀思異物而白上天照大御神也是者草那藝之太刀也

慶雲二年釋奠文

刀利康嗣

惟某年月日朔丁大學寮某姓名等以清酌蘋菜敬祭故魯司寇孔宣父之靈
惟公尼山降彩誕斯將聖抱千載之奇姿值百王之弊運主昏時亂禮廢樂崩
歸魯去齊含歎於衰周厄陳圍匡懷傷於下蔡門徒三千達者七十敷洙泗兮
忠孝探唐虞兮德義雅頌得所衣冠從正豈謂頽山難維梁歌早吟逝水不停
極奠奄設嗚呼今聖朝魏々學校洋々褒揚芳德鑽仰至道神而有靈化惟尙
饗

十七憲法ノ一節

五日絕饗棄欲明辨訴訟其百姓之訟一日千事一日尙爾況乎累歲須治訟

者得利為常見賄聽讞便有財之訟如石投水乏者之訴似水投石是以貧民則不知所由臣道亦於焉闕

六曰懲惡勸善古之良典是以無匿人善見惡必匡其誣詐者則為覆國家之利器為絕人民之鋒劍亦佞媚者對上則好說下過逢下則誹誇上失其如此人皆無忠於君無仁於民是大亂之本也

懷風藻ノ例

從三位中納言兼中務卿石上朝臣乙麻呂

石上中納言者左大臣第三子也地望清華人才穎秀雍容閑雅甚善風儀雖勗志典墳亦頗愛篇翰嘗有朝譚飄寓南荒臨淵吟澤寫心文藻遂有銜悲藻兩卷今傳於世天平年中詔簡入唐使元來此舉難得其人時選朝堂無出公右遂拜大使衆僉悅服為時所推皆此類也然遂不往其後授從三位中納言自登台位風采日新芳猷雖遠遺烈蕩然

五言飄寓南荒贈在京故友

遼復遊千里徘徊惜寸心風前聞送馥月後桂舒陰斜雁凌雲響輕蟬抱樹吟相思知別慟徒弄白雲琴

淡海朝大友皇子

皇太子者淡海帝之長子也魁岸奇偉風範弘深眼中清耀顧盼煒燁唐使劉德高見而異曰此皇子風骨不似世間人實非此國之分嘗夜夢天中洞啓朱衣老翁捧日而至聲授皇子忽有人從腋底出來便奔將去覺而驚異且語藤原內大臣歎曰聖朝萬歲之後有臣猾間覺然臣平生日豈有如此事乎臣聞天道無親惟善是輔願大王勤修德災異不足憂也臣有息女願納後庭以宛箕帚之妾遂結姻戚以親愛之年甫弱冠拜太政大臣總百揆以試之皇子博學多通有文武材幹始親萬機群下畏服莫不肅然年二十三立為皇太子廣延學士以為賓客太子天性明悟雅愛博古下筆成章出言為論時議者歎其洪學未幾文藻日新會壬申之亂天命不遂

五言侍宴

皇明光日月帝德載天地三才竝泰昌萬國表臣義

結論

吾人ハコ、ニ我國文學ノ變遷ノ大勢ヲ了セリ。ソモ、文學者ハ時代ニ感化セラレザルヲ得ザルガ故ニ、文學モ亦單獨ニ變遷セズシテ、時ノ政治・宗教・美術・風俗ニハ最モ密接ニ影響セラレ、ナリ。

我國上古ニ在リテハ、神ヲ敬ヒ祖ヲ重ズルコト最モ厚ク、所謂祭政一致ノ世ナリシカバ、自ラ文學ノ大半ハ祝詞・宣命ト記・紀ノ歴史文トナリキ。應神ノ朝漢字傳ハリ、欽明ノ朝佛教來リテヨリハ、思想ノ上ニモ、文藝ノ上ニモ開展セル所鮮少ナラズ。

大化ノ新政成リテ、凡百ノ文物斐然トシテ、章ヲ成セバ、人丸・赤人ノ歌モ出デ、天平式ノ美術ヲ出セル國民ノ同化力ニハ、兩假字發明セラレ。是國文學ノ大ニ起ルベキ機運至レリト

イフベキモノ、惜シムラクバ大學・國學興リタレド、學ブ所既ニ吾國ニ涉ラネハ、其爲ス所皆比々トシテ漢土ニ心醉セル者ノミナルヲ。

此後國文頗ル振ハザリシガ、漢土ヘノ交通絶ユルニ及ビテ、其反動トシテ自ラ吾國ノ文學モ熾ニナリヌ。巨勢金岡ノ畫、小野道風ノ書出デタル時ハ、貫之ガ國文ヲ以テ、一世ヲ風靡セシニアラズヤ。是正ニ藤原氏ノ權勢ノ熟セル時ナリ。藤原氏ノ權勢ヲ專ニスル方法ハ、己外戚タルニアリ。己外戚タル方法ハ、子女ヲ賢ニスルニアリ。清少納言・紫式部之ガ爲ニ聘セラレ、赤染衛門・和泉式部之ガ爲ニ仕フ。船ハ龍頭・鷄首ヲ泛ベ、車ハ檳榔・絲毛ヲ裝フ。カノ平等寂滅ヲ主義トセル佛教サヘ、天台・眞言ノ行律沙汰トナレリ。サテコソ艷麗ナル平安文學ハ、多クハ貴族婦人ノ手ニ成リタルナレ。

後三條以後藤原氏屏息シテ文學ハ男子ノ手ニ移ル。白河院ガ萬燈ノ供養ニハ、雲林院ニ大鏡磨ギ出サレ、今昔物語ノ瀟洒タル文章ハ、鳥羽繪ノ飄逸ナルト相稱フ。鎌倉ノ政治ハ、百官八省ナラズシテ三所ノミ。律令格式ナラズシテ式目ノミ。宗教ハ淨土法華ノ易行道カ、融通念佛ノ他力宗ナラズバ、不立文字ノ禪宗ノミ。之ヲ法華八講ノ豪華ナルニ比セヨ、是正シク近古ト中古トノ文學ノ相違ナラム。又見ヨ、書ハ上代様ニ固定シ、畫ハ繪卷物ノミ多キヲ、コレ歷代撰集ガイツモ古今集ノ舊套ヲ墨守シ、架空ノ作り物語衰ヘタル時好ノ反映ニ非ズシテ何ゾヤ。ソモ、淨土法華起リテ、始メテ日本流ノ佛教トナリヌ。コハ正シク教佛ガ國民一般ノ宗教トナリシ果ニシテ、又文學ノ作者ニ僧侶多キ一因ナラムカナ。

近古ノ終ニ及ビテ、宋元ノ風氣入り來リテ、如拙雪舟出デ、磁器堆朱起レバ、劇トシテノ猿樂モ亦成ル。

徳川家康出デ、佚書ヲ索メ、遺文ヲ集メテ、文學復興リ、漢學先榮エテ、仁齋徂徠ヲ出セバ、古典ニ契沖季吟和歌ニ茂睡ヲ見。菱川師宣西川祐信浮世繪ヲ描ケバ、西鶴自笑浮世草紙ヲ著ス。カクテ十一代家齊將軍ハ、位ハ從一位ニ、官ハ太政大臣ニ任ゼラレテ、其勢威日ノ中スル如クナル時ハ、本居宣長曲亭馬琴等、或ハ古典ヲ闡明シ、或ハ讀本ヲ著作ス。見ルベシ、明治復古ノ氣運ハ、此時ニ胚胎シタルヲ。

今ハ國威ノ隆前古ニ比ナク、文藝ノ盛後昆ニ傳フベシ。古ニ鑑ミテ今ヲハカルニ、更ニ大文學ノ此鴻猷ニ稱フモノナカ
ルベケムヤ。

新日本文學史終

附錄

紀元元

近世

明治維新

天保 十四	弘化 四	嘉永 六	安政 六	萬延 三	文久 三	元治 三	慶應 三	年代
十二年第十二代家茂將軍 八年大鹽平八ノ亂アリ	四年孝明天皇 六年第十三代家定將軍 二年亞米利加合衆國船來ル	五年第十四代家茂將軍 六年外國卜條約ヲ訂ス	櫻田ノ變				二年第十五代慶喜將軍 三年十月德川氏政權ヲ返上ス	政治史ノ大要
							明治六年八田知 紀殺	和歌
	元年宿屋飯盛殺							俳諧俳句
								脚本 瑠ト
十八年鈴木朋 一年藤井高尙 殺	二年伴信友殺 三年高田與清殺	二年橋守部殺						擬古文
			五年廣瀬漢窓殺 六年佐藤一齋殺				明治六年安井息 軒殺 三年鹽谷守陰殺	和漢混和文
三年頼山陽殺								小説
十三年爲永春水 柳亭權次殺此年	二年十返舎一九 殺	元年曲亭馬琴殺						

附錄

貞應	二年後醍醐天皇 三年僧道元宋ニ入り禪ヲ學ブ	元年實朝弒セラ ル	二年海道記成ル
承久	三年仲恭天皇承久ノ亂三上皇 遠島ニオハス	元年實朝弒セラ ル	平家物語コノ比 成レルカ
建保	六年	元年鴨長明鎌倉 ニ至リ實朝ニ謁 ス	保元平治物語コ ノ比成レルカ
建曆	二年順德天皇		宇治拾遺物語コ ノ比成レルトイ フ
承元	四年浄土真宗ノ開祖親鸞流サ ル		二年長明方丈記 ヲ草ス
建永			
元久	三年建仁寺建チ禪宗盛ニ行ハ ス	二年新古今集成	
建仁	三年第三代實朝將軍 二年土御門天皇		
正治	元年源賴朝總追捕使トナル 三年賴朝征夷大將軍ニ任セラ ル		
建久	四年富士牧行會我兄弟復讐 後鳥羽天皇ノフキ		
文治		四年鎌倉ニ兒延 年ノ舞アリコノ 舞猿樂ノ粉本ナ トリイフ	

年	政治史ノ大要	和	歌	催馬樂朗詠今様	散	文
文治	平氏亡ン	四年千載集成ル俊成建久四年ニ 興ス				
元曆	後鳥羽天皇 後仲亡ン	宮内卿コノ比ナリ				
壽永	二年平家四海ニ奔ル					
養和	安徳天皇 清盛薨ス					
治承	四年賴朝義仲兵ヲ擧ク福原遷都					
安元						
承安						
嘉應	二年高倉天皇					
仁安	三年六條天皇 二年平清盛太政大臣 トナル					
永萬						
長寛						
應保						
永曆						
平治	二條天皇 平治ノ亂アリ					

元元紀

中古

新維治明

萬壽	四年御堂關白道長		
治安	三		
寬仁	四後一條天皇		
長和	五三條天皇		
寬弘	八		
長保	五元上東門院中宮トナル	拾遺集コノ比成レルカ	
長德	四元藤原道長關白トナル		
正曆	五		
永祚			
永延	二一條天皇		
寬和	二花山天皇		
永觀	二	元年源順卒	
天元	五		
貞元	二		コノ比神樂儀馬樂再定セラル
天延	三		
天祿	三圓融天皇		
安和	二冷泉天皇		
康保	四		源氏物語コノ比成レルカ 赤染衛門コノ比ノ人カ 和泉式部日記コノ比成レルカ 紫式部日記コノ比成レルカ 枕草子コノ比成レルカ

應和	三		
天德	四	四年天德歌合	大和物語コノ比成レルカ
天曆	一〇	村上天皇	空種物語コノ比成レルカ 後ナリ
天慶	九	三年天慶ノ亂アリ	
承平	七	七朱雀天皇	
延長	八	〇六年賀聖降子成ル齋ハ金岡齊ハ道風	七年土佐日記成ル
延喜	二	元年菅原道真左遷	元年三代實錄成ル 四年菅原道真薨
昌泰	三	三醍醐天皇	十二年紀長谷雄卒
寬平	九		
仁和	四	光孝天皇 此年基經高機ヲ關白 又四年宇多天皇	二年僧正遷昭寂
元慶	八	陽成天皇	文德康秀コノ比ノ人ナリ 小野小町 四年在原業平卒
貞觀	一八	清和天皇	
天安	二		神樂儀馬樂ノ章曲ヲ撰定セラル
齊衡	三		十一年續日本後紀成ル 竹取物語伊勢物語コノ比成レルカ
仁壽	三	文武天皇	二年小野篁薨

紀	元自六〇〇一 至七〇〇一	三十八年任那入貢 五十六年天照大神伊勢度會ニ遊リ玉フ	
紀	元自五〇〇一 至六〇〇一	四年開化天皇 六十一和ニ崇ル 七十三和ニ崇ル ニ調役ヲ課ス	
紀	元自四〇〇一 至五〇〇一	四十七年孝元天皇	
紀	元自三〇〇一 至四〇〇一	七十一一年孝靈天皇	
紀	元自二〇〇一 至三〇〇一	八十九年孝安天皇	
紀	元自一〇〇一 至二〇〇一	五十六年孝昭天皇 八十六年孝德天皇 八十八年孝德天皇	
紀	元自一〇〇一 前	神武天皇大和橿原宮ニテ即位 トノ高丘ニ登リテ地形ヲ見給ヒ秋津洲	神武天皇東征シ玉フ軍中御製多シ

明治三十五年十月十日印刷
 明治三十五年十月十五日發行

不許複製

岡井慎吾

金港堂書籍株式會社

東京市日本橋區本町三丁目十七番地

右社長

原亮一郎

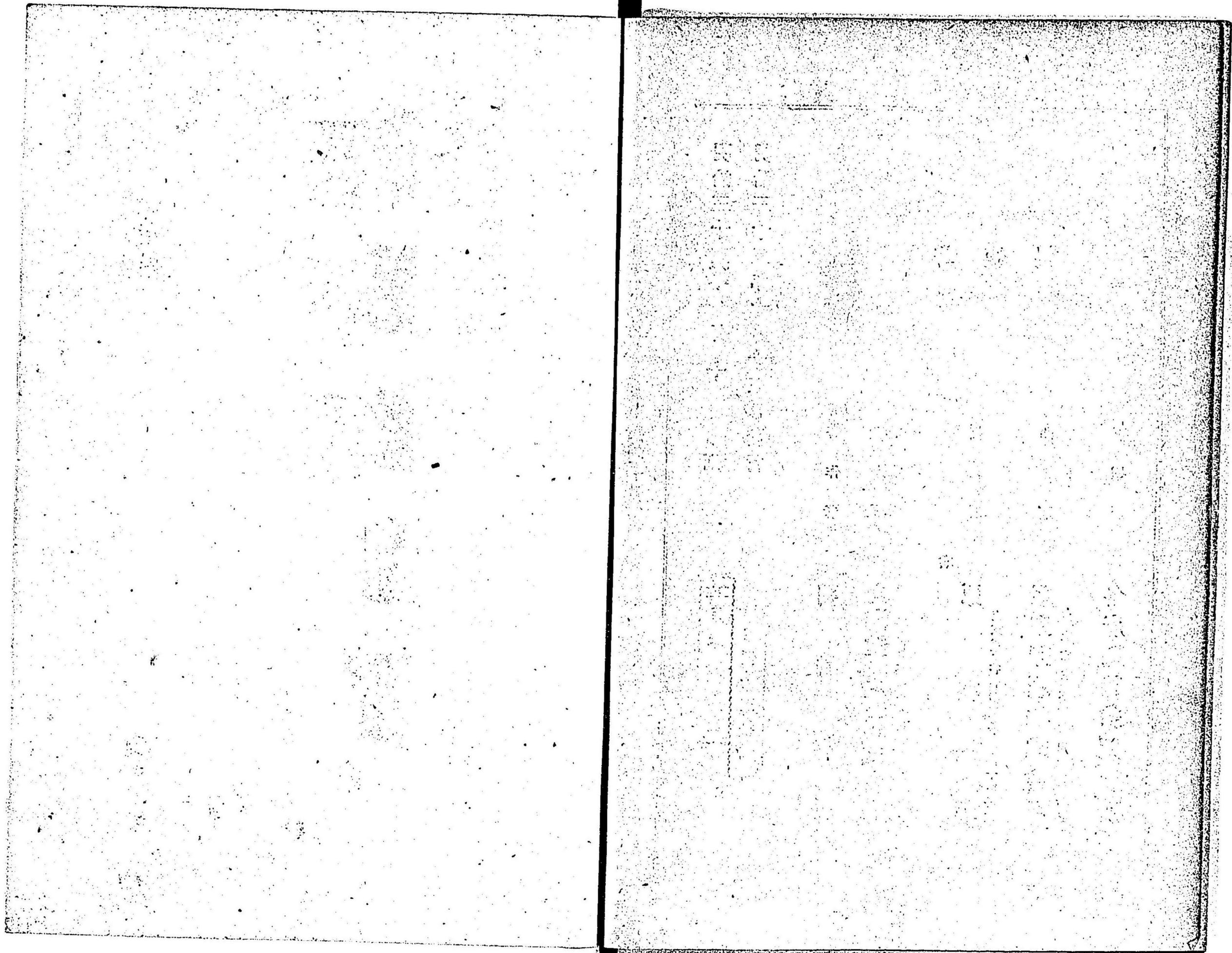
東京市下谷區龍泉寺町四百十四番地

東京印刷株式會社

東京市日本橋區兜町二番地

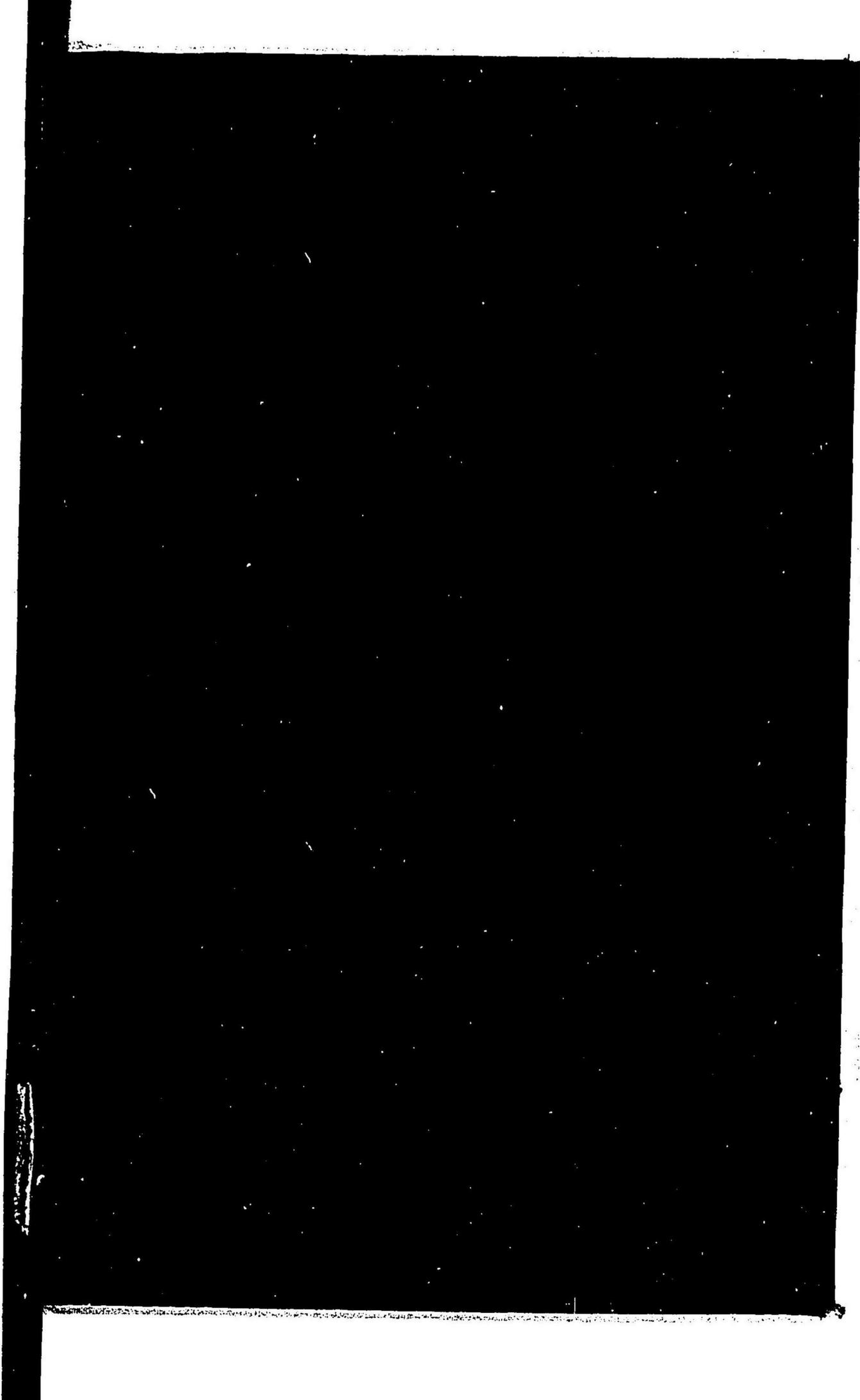
各府縣特約販賣所

新日本文學史
 定價金五拾錢



66

246



86
246

084918-000-5

86-246

新体日本文学史

岡井 慎吾/著

M35

DBB-0202



